5861
2144
no.6

大正十年十一月廿九日印刷納本
大正十年十二月一日發行

LA SEMANTO

種蒔く人

行動と批判

第一年 第一巻 第三號

—非軍國主義號—

十二月號

種蒔き社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嘗て人間は神を造つた。今や人間は神を殺した。造られたもの、運命は知るべきである。

現代に神はゐない。しかも神の變形はいたるところに充滿する。神は殺されるべきである。殺すものは僕たちである。是認するものは敵である。二つの陣營が相對する。この狀態の續く限り人間は人間の敵である。その間に妥協の道はない。然りか否かである。眞理か否かである。

眞理は絕對的である。故に僕たちは他人のいはない眞理をいふ。人間は人間に對して狼である。國土と人種とはその問ふところでない。眞理の光の下に、結合と分離とが生ずる。

見よ。僕たちは現代の眞理のために戰ふ。僕たちは生活の主である。生活を否定するものは遂に現代の人間でない。僕たちは生活のために○○の眞理を擁護する。種蒔く人はここに於て起つ――世界の同志と共に！

種蒔き社

目次

本欄

アンチミリタリストの立場（題言）
非軍國主義の論理（評論）‥社　論
戰爭はよくない（詩）‥‥武者小路實篤
平和私觀（評論）‥‥‥‥‥古江　孤雁
眼（小說）‥‥‥‥‥‥‥金子　洋文
コスモポリタン（童話詩）‥佐々木孝丸
その夕の地線上。この若き兵隊さん（漫畫）‥‥柳瀨　正夢
露西亞革命と婦人（評論）‥山川　菊榮
革命家を取扱つた最近の創作（批評）‥‥‥‥‥藤井　眞澄
保證人（小說）‥‥‥‥‥吉田　金重
空を指して語る（小說）‥‥內藤　辰雄
田園雜記（感想）‥‥‥‥神近　市子
月（感想）‥‥‥‥‥‥藤森　成吉
菊地寬氏への公開狀‥‥‥涌島　橋浦
批評―斜塔―弘二―小牧―正夢―
正俊―逸平―洋文―默太
表紙及カット―柳瀨正夢
世界欄―地方欄―錄人―動靜

執筆家

秋田雨雀　有島武郎
馬場孤蝶　アンリ・バルビユス
エドワード・カーペンタ　クリスチアン・コルネリセン
江口渙　ワシリイ・エロシエンコ
藤井眞澄　藤森成吉
福田正夫　アナトル・フランス
ポール・ジル　長谷川如是閑
林倭衛　平林初之輔
石川三四郎　神近市子
加藤一夫　川路柳虹
宮地嘉六　宮島資夫
武者小路實篤　百田宗治
小川未明　大山郁夫
ポール・ルクリユ　白鳥省吾
富田碎花　山川菊榮
吉江喬松　小泉鐵

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

アンチミリタリストの立場

僕たちは國と國との戰爭には絶對に反對する。それが、いついかなる場合であらラと。何故か、國と國との戰爭に參加することは、今の場合、直接に僕たちの手で國境を同うする仲間を殺すことだ。そして僕たちは常に誰れのために戰ひつゝあるか。

僕たちの親、妻、子、兄弟たちは誰れのために虐げられて來たか。そして、この上、僕たちは誰れのために戰はねばならぬのか。そういふ運命の人ば僕たち許りではない。ありとあらゆるものを奪取つた〇〇〇〇は、更に僕たちの生命と、世界の兄弟たちの生命を絶とうとする。

僕たちは國と國との戰爭には絶對に反對する。それが、いついかなる場合であらうと。何故か、國と國との戰爭に參加することは、今の場合、直接に僕たちの手で禍をともにする世界の同士を殺すことだ。そして、僕たちのほんとうの敵は誰れでならねばならぬか。知れ、同民族を虐使するところのものは、多くの場合、同民族である事實を。

一つの自由しかない。

與へられたるものを取れ。かくして、農民が自らを解放するごとく、勞働者が自らを解放するごとく、プロレタリアの大多數であるところの〇〇は自らを解放する。

東167806
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

非軍國主義の論理

生活展開の爲めにその各段階に於てその指導動機を必要とすることは言を俟たないほど明白なる事實である。それは一個の事實であつて、決して空なる假定でない。たとひ現實的立場に立つて、あらゆる種の指導的要素を否認するものといへども、その事實だけは認めざるを得ないであらう。否、現實的立場に立てば立つほどそれが明かに認識されるのである。生活はそれ自身で進行する。しかしながらそれ自身そのまゝで進行するがために、生活自らがかゝる指導的要素を創造して來るのである。本原的にいへばそれは本能である。生物の進化過程に於て本能がとるところの位置は正しくその指導要素でなくして何であらう、もしも生物にして本能を缺いてゐたならば、生物は必然に死せざるを得ない。死を避けることのみにそれを限定するのはあまりに狹義なる解釋であるにしても、それの一例として充分である。さうして本能の下に生物はそれの進化をつゞけてゐる。本能それ自身にいかなる意義を認めるかは別問題である。たゞそれが生活發展の一指導要素なることを認めればそれでいゝのである。

生活は單に人生のみに限らない。生物全體の生活なのである。たゞ之を人間に限るとせよ。人間はかつて本能のみによつてそれの生活を指導して來た。しかしながら存在は一つの發展的現象なるが故に、生活の進化に伴つて、それの指導的要素の進化するのは又やむを得ざることである。指導的要素が生活より一歩前にあり、若しくはそれより一段高きところの目的概念をもてることは、それの職能からして察せられる。さうして生活が發展すればその位置も自ら進化するのは當然である。それは生活それ自身に對しては絶對的位置を保つてゐるが、それをもふくめる生生活全體からいへば相對的に進行するものである。故に人間の生活に於て、本能がつひに人生を指導する能はざるに至り、そこに本能に代つて理智があらはれた。この偶合理智が新たに生じたと見るよりも、やはり本能の變形と見る方が正當である。しかも現實として見

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐるとき、それは本能以外に一つの位置を保つものである。そこにも存在の獨立性が認められる。

理智の發生は極めて新らしい。故にそれの大部分は依然として本能の發動として認められなければならない。しかもそれは概念をつくり、觀念をつくり、それを以て本能の上に位置して、本能と協力して生活展開の用に立つてゐる。人間生活の初期に於ける半理智的半本能的指導動機は正しく、本能に即せる一概念である。それをこゝに權威と名づける。かくして權威が生活の主なる指導動機となつた。

權威はいかにして發生したか。それは人間が半ば理智的となつてから、自然を怖れたところから生じた。本能のみの世界に於ては怖れはたゞ怖れのみである。それが權威と化するには半ば開明された理智を必要とする。哲學は驚きにはじまるといふが、それが正しくその事實を證明してゐるのである。動物心理學は動物の恐怖をも調べることが出來る。しかもそれは決して權威のあとを見出すことが出來ない。哲學の第一の仕事は驚きを解明するところに存してゐた。かくして權威が構成せられ、その下に於て人間はその生活をつゞけることが出來た、それの具體化したる第一の概念を神と名づける。さうして神といふ概念があらゆる權威の基礎であり、それの源となつてゐた。それの指導がなければ人間はそれの生活をつゞけることが出來なかつたのである。そこに宗教生活が人間の生活の第一段階を占めることが證せられる。

生活は全體としては種族の生活である。ことにそれが初期に於てさうである。種族が第一なることは生物進化の迹に於て明にうかがはれる。個は第二である、個は種のために犧牲となるべきであつて種は決して個のための用とはならない。以て全體としての生活は個を無視して種に即する。その種の生活の第一の基礎は、家族でありつひに國である。その國に屬することによつて、種はそれの生活をつゞけ、兼ねてその個も安全なのである。そこに國家が權威化された、さうしてこれが神の權威と相結んで國家が神化された。この場合地上にあつて神を代表するものは僧であるが、僧はたゞこの使にすぎないで、國家に於ける權威は王として現出して來た。これが原始時代に於ける政敎一府の說明である。

種族とは比較的のことである。植物と動物とはよく區別される。しかしながらバクテリアと微細動物との間に劃然たる區別を見出しがたいごとく、また人類と類人猿との比が、類人猿と他種の猿との差よりも近いごとく、人間の內部に於ける種族はよく小分される、さうして全體の見地は相對的となるが、個の見地が絕對的であるが故に、人間はそれぞ〳〵の種族を重しとしてゐる。そこに自己の國家を重んずる第一の證がある。他種は自己の種にとつて敵である。その關係は全人類が他の生物に對してもつところと大差はない。故に各のかくの如き國家は自らの神、自らの王を全體の神、全體の王と

なし、之がためにつくすのが、期せずして全體のためにつくすのであるが如く考へる。全體と考へざるものといへども少くとも自己の神、自己の王につくすのである。さうして自己の神、自己の王のために、その領土をひろげて來るやうになる。それは宗教的必要から生じたのであつて、そこに軍國主義の發生がある。軍國主義は最初各生物がその種の發達のためにつくつた必要が自ら增大することによつて生じたのである。さうしてまたその種の生活の必要から他種を侵してゐたものが背じて、侵略のために侵略をことゝするやうになる。軍國主義が防禦から攻撃にかはつて來たのである。それが軍國主義の發生であつた。知るべし、軍國主義とは國家主義と相はなれないものであることを。國家の神化がそれの第一の理由であるとするならば、軍國主義は依然として神化せられたる權威から發生したものに外ならない。さうして國家はそれの種族の內部から增大してしいよ〳〵大きくなり、それの基礎をかたくすると共に、それに伴ふ理智が之を辯明して、或は主權を發生させ、王權を振張せしめた。それがさらにかたくなると共に、つひにそれはそれ自身を絕對的に神化せしめ、さうしてかつてそれがもとであつた宗教と絕緣するに至り國家はつひに進化して權威それ自身となつた。さうして軍國主義も之に伴つてその方法と理論を強くし、いはゆる近代國家に於ける強大なる軍國主義をつくり、同時に近代の民族的自覺と伴つて、いよ〳〵それの地步をかたくした。

しかしながら知るべきである。人は久しくもとのまゝにゐない、理智はかつて權威をつくり、それを神及び國家に屬せしめてゐたが、その同じ理智が進化するに及んで、自ら權威を疑ふやうになつた、こゝは政府の權威の大なるものに對する反抗としてゞも、またそれ自身の發展としてゞも、つひにかつて創生したる神の存在せざることを證明せざるを得なくなつた。神はすでにゐない、神のごとき權威のみが存する。これ火のない所に煙のみあるわけである。その理由は如何であるか。これが近世に於ける第一の問題であつた。近世哲學の第一の問題が自己に存したことの理由は之によつても知られる　權威の本體なくして權威の作用のみある理由はつひに證明せられた。それは權威が神化國家に存するにあらずして實に○○自身の個人に存するのである、○○○○○。然らば今や權威は神をはなれて人に歸つた。人とは何であるか、個人である。自我である。それ以外の何物でない。こゝに於て權威はつひに個人々々に移つて來た。それが自然に對する人間の謀反の第一步である。人生字を識る憂患の初めといふのはそれの一證に外ならない、今や個人は生活の意義を種族に認めずして個人に認める。それが自覺なのである。さうしてそこに理智が本能の上に來たことが知られる。種族の生活に於ては團體が第一であるが、個の生活に於ては何物を除いても自我が第一である。デカルトにはじまる近代哲學はそれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の知的經驗をなしてゐるに過ぎない。さうして現代は正しくこの時代の連續である。それが個と全との衝突の源であり、個人主義と國體主義との相分のはじめである。

理智でひらいたこの個人の自覺は、同時に理智の優越を認めしめると共に、そこに科學の世界をおいた。科學は理智の直接のものである。科學はつひに古代の神が存するところのあらゆる現象、あらゆる事實を説明するに充分である。こゝに於て、人間はそれが有する習慣性によつてつひに科學をしてもとの神の位置におかしめた、そこに科學の神化がはじまる。この科學の神化がひとしく人間の保守性即ち習慣によつて、國家を保存して來て、それと連絡させて、つひに國家を神化せしめ、そこにいよ〳〵軍國主義を發展させた。科學そのものゝ發達による武器、軍器の應用がなほそれに力づけたのである。しかも科學の神化のもたらす害はこれに止まらない。それは資本主義の發生であつた。資本主義の發生は、一面には國家を解體せしめて、即ち種族による國家を解體させると共に新たなる資本制度の國家を發生せしめ、さうして舊來の權威國家をなほのこと強大にせしめた。即ち一たび發生したる國家は、それを發生せしめたる生活の一動機が他に新たなるものを創造するや常にそれとかたく連絡して、いよ〳〵強大となつて來た。そこに近代國家の資本主義化がある。さうして軍國主義は全く資本主義の事である。さうしてそれもまた否認することの出來ない事實であり、事實さういふ資本主義的國家が、近代に於てそれだけの効果をあげてゐたのである。しかしながら國家が軍國主義であり、さうして資本主義が軍國主義であるならば、つひに軍國主義は否定されざる事實とし永久に存しなければならないのである。そこに非國家主義、及び社會主義の意義が存するのである。非軍國主義は必然的に非國家主義であり、社會主義である。しかしこゝにはことさらにそれらの具體論を避けておく。

理智は一たび個人の自覺を促した、さうして權威は自我の上に來り、自我の權威は何物を以てしかも抗すべからざるものと云つた。それにもかゝはらず、古代の制度は依然として現實に存する。これを如何にすべきであらうか。今や生活の重心は種にあらずして個である。個は神を認めない。個は神に對するさゝげ物を要しない。ニイチエは一時獨逸軍國主義の哲學であるが如く感ぜられた。しかしながらスティルネルには如何であるか。哲學は本體能よりも自我論になつてゐる。今や何人といへども自我を主張すべきである。Ich hab mein Sach auf Nichts gestellt! 理智は現代の生活動機であり、理智なくしては生活は不可能である。さうして舊來の固定せる制度は理智以前のものである。批評は下された。非軍國主義の論理は完成する。これ余等の論理である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

戰爭はよくない

武者小路實篤

俺は殺されることが
嫌いだから
人殺しに反對する、
從つて戰爭に反對する、
自分の殺されることの
好きな人間、
自分の愛するものゝ
殺されることのすきな人間、
かゝる人間のみ戰爭を
讚美することが出來る、
その他の人間は
戰爭に反對する。
他人は殺されてもいゝと云ふ人間は
自分は殺されてもいゝと云ふ人間だ、
人間が人間を殺していゝと云ふことは

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

決してあり得ない。
だから自分は戰爭に反對する。
戰爭はよくないものだ。
このことを本當に知らないものよ、
お前は戰爭で
殺されることを
甘受出來るか。
想像力のよはいものよ。
戰爭はよしなくならないものにせよ、
俺は戰爭に反對する。
戰爭をよきものとは斷じて思ふことは出來ない。

（二二・一・一〇、三一）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

平和私觀

吉江孤雁

爭鬪は愚かなことである。言論上に於ても文筆に於ても、まして體力に於てはさうである。世の中には一生人と爭はずして過し得る人がある。その人は必ずしも盲從せず、屈伏せず、己れを持して、下りもせず、高ぶりもせず、その人の通る可き途を通つて行く人がある。而して何人といへども、そのやうな生活がなし得らるゝ筈である。

各自がその執る可き途を執るなら　、途は自づとその前に開けて來る。それが開かれなかつたならば、默して待つ可きである。

世には爭鬪によつて――論爭であらうが、力爭であらうが――初めて相互の價値が相互に認められ、或は自覺せらるゝ如く考ふる人がある。併しこれは、各自が互々に明白なる表現を一時に照し合はせたといふ現象にすぎない。爭はなくても、靜かに正確なる自己表白をすれば、それでわかることである。一時に持ち寄らずとも判明すべきことである。正當な明確な自己表現が出來ないが故に、相手の力をかりてそれをなさうといふことは愚かなことである。相手と論爭をしてゐる間に初めて自己の價値を具手すといふことは愚かなことである。人に依つて初めて己れを知ることである。これは愚かなことであり、自信のないことである。

世の中に取り亂したる爭鬪くらゐ醜いものはない。いや、爭鬪とは取り亂したる人生の姿である。亂雜即ち爭鬪である。これは冷靜な叡智による理解力と、藝術上の同感是認とを缺く結果である。

愚にして醜きものは惡い。

團隊と團體との生活關係は、個人生活の關係とは異ふといふ人があるかも知れない。然しそれは誤りである。たゞその關係が少し複雜になり、團體意識の中で個人意識が多少薄くなるといふだけである。若し個々人の意識にして明瞭ならば、その團體を通じての意識も同じ調子をもつて明瞭である筈である。

群衆意識といふことに餘り重きを置いてはならない。自覺少なき衆多の集合意識は、ギユスタアブ、ル、ボンをまつまで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もなく、兎角英雄をつくり出したがる。支配者を、統率者をつくり出したがるものである。而してこの場合の支配者、統率者は、たゞ所謂「力」の所有者であり。餓鬼大將であることが多い。暗殺者、刺客なぞといふものは、この餓鬼大將の力の反證を示すものである。

このやうな群衆意識は過去に於て多く現はれた。現在に於てもまた見られる。併し、我々は斯樣な群衆意識を排斥する、個人間の道德を團體間の道德に移すことが困難であつても、さうす可きが當然である。個人間に友情が結ばれるならば、また友人等の團體が成立するならば、その團體相互の間にも友情の出來るのは當然のことである。

人間の團體生活の最初は、おそらく小さな種族の集つて作つた部落であらう。この部落には酋長があり、その部落同士は互に爭鬪奪略を事としてゐたのであらう。

今日の人間生活の團體の最も大なるものは所謂各國民と呼ばるゝものゝ生活であらう。この團體には今日もなほ野蠻時代の風習をそのまゝ止めて置かうとする人々がある。軍備なるものがそれである。而してこゝ團體生活の大部分を支配する群衆意識をなづけて愛國心と呼び、これこそ野蠻の遺風たる軍備こを結び付けて、愛國心と軍國主義とを混同せんとする如き人々が、今日でもなほ、各國に於て、存在しないと個人が斷言し得らるゝであらうか。

友人に對して常に敵意を感じ、友情ある團體同士が常に絶對準備をしてゐるといふことは考へ得られざる矛盾である。假想敵國といふ語は、友人をいつも敵と思へこいふ事である。人を見たらば盜賊と思へといふ道德である。信のない、疑惑に捉へられた、小さな惡魔の道德である。

この惡魔の誘惑はいづこの國にでも行はれる。宗敎が異ふといふ間隙に乘じて、この惡魔は、往時、その惡戲が手を伸ばすことが出來た。今日に於ては、宗敎は問題でない。同じ宗敎信者同士が惡魔のトリックに引掛つてジタバタしてゐる。昆蟲の中にかぶと蟲と俗に呼ばるゝ蟲がゐる。彼等は甲冑を身に着け、いつでも出合ひ頭に嚙み合をする。今日の人間の生活で、この甲冑を備へんがために、非常な苦しみをしてまでも努力をするものがある。これは愚かなことである。

團體同士の間に友情を持ち得るには如何にすべきかといふに、それは、理解と藝術的同感是認を相互に持つことである。それを持つには如何にすべきかこいふに、これは各個人間に於けると同じく、各自の團體が、明確なる自覺と、的確なる藝術的表現をなすことによつてこの目的は達せられる。

自覺なき個人が爭ひをする。何故なれば彼は宇宙間に於ける自己の正當なるポジシオンを知らないが故である。的確な

藝術的表現を持たないものが直ちに腕に訴へる。何故なれば直接行動以外に彼は己れを表白する術を知らないからである。

團體生活も同じである。國民生活も同じである。眞に自覺したる一國民であるならば、彼等は、自己等の特色に從つて、平和の間に、自分等の果たすべき使命を世界文明に對して果たすのである。この自覺を持てる國民ならば、自由にして的確なる藝術的の自己表白を持ち得るのである。

この自覺と、この表白とを通じて、各國民は互に友情を持ち得るのである。

友情とは確かなる自覺に基づく相互敬愛の情である。各自の間に勿論相異點がある。この相異は友人間には衝突とはならずして、却つて長短相助くる機緣となるのである。

國民的團體生活の政治的關係に所謂同盟なるものがある。併しこれは友情關係ではない。利害關係である。更に言ひ換へれば、弱點の抑へ合ひから出來てゐる關係である。これを腐れ緣と呼ぶのである。昨日の友邦は、一定の時期を過ぐれば、路傍の人となり、更に敵邦に轉ずる。政治を政策と心得てゐる人々の結ぶ關係はこれである。

友情は不變であり、永久に育てられる。人間同士の一時の方便的の約束ごとではなく、宇宙の創造に參加してゐる姿である。遊戲ではない。

政治をそこまで徹せしめない政治家は僞善者である。個人關係と公人關係とは異ると考へてゐる英國流の政治家は當然嫌惡せらる可きものである。

要するに、各自の團體生活——國民生活を通じこの明確な自覺がないが故に——自己の特色、價値、使命を知らないが故に、まづ第一に體力に訴へて自己の價値を見出さうとするのである。この價値を見出さず、この自覺を持たないものは、永久體力にのみ訴へてゐる。永久その體力を表現する準備ばかりしてゐる。

憐れむべき愚なる振舞ひである。

然るに世には更に愚かなるものがある。これは一國民、一團體生活に通じこの自覺が起ると、それが直ちに對抗的觀の念、敵對的感情、或は更に征服慾をすら呼び醒ますのであると考へる連中である。なる程歷史はそのやうな現象を見せてゐる。然しそれは或國民が眞の自覺を持つたのではなくして、自己の力を誤信し、過信し、他に對する理解を缺き、各自共立の同感を持ち得なかつた爲めに歸因するので、自覺ではなくして、誤醒であり、自信ではなくして、うぬぼれである。それを最少し突きつめていへば、これは一國民、一團體の一般的な自覺ではなくして、或種の少數者の野心、無智、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

誤解にすぎない。これ等の少數者等は、多數を代表し、多數のためを計つてゐるが如き心持をもつてゐたかも知れないが實は餓鬼大將に過ぎなかつた。戰爭は、從來、この餓鬼大將等の衝突にすぎなかつた。

若し人が肯定するが如く、人間に戰鬪本能があり、それを如何に指導すべきかを問題とするならば、人類が共通に切り開いて行く可き新らしい領土がある。その方面へこの本能を導いて行つたらば、よいであらう。

その領土とは何であらうか。自然の世界である。特に我が日本の如き、眞の意味に於て人間の文明は出來てゐない。自然力は常に思ふまゝに日本の島國を暴らしてゐる。これに對して我々は殆ど何等の防禦もしてゐない。自然力の暴るゝがまゝに身を委かせて、驚嘆してゐるばかりである。佛蘭西人をして言はしむれば、「日本に於ては、火災ですらも天災である。」日本人は火すらも思ふまゝに制御は出來ない。水の害、風の害で、年々幾人の人が命を失ふことであらう。

自然に對してかくまで無力な日本人を馳つて、人間同士に對しては强力なる戰士たらしむるといふ指導者等は、眞に恐るべきものである。

無抵抗主義のトルストイが晩年、農民等の胸の中に眞の生きた人間を求めやうとした心理の一事は、この自然に對する勇敢なる戰士こそは、沈默と勞働との間に、人間の平和をもたらすものだと考へたがためであらう。

眼

金子洋文

一

午前の十一時頃であつた。

『今日は仕事はよしだ』と言つて、寫眞屋の主人が座敷にはいつて來た。そして奥さんに酒を命じた。

『何うしつのだ』と、私は彼の蒼白く緊張した顏を見あげて言つた。

『今、やいな眼を見た、一寸顏をあげてと言つたら、客がびつくりしたやうに天井を見たのだ、光線のせいだつたら――、

その眼が、あの時の男の眼にそつくりなのだ、十年振で〇〇のいやな日のことを思ひ出した。』

酒が出るまで彼は無言でゐた、私も無言でゐた、外をながれてゐる冷たい曇日の光が、私に不安をおこさせた。

二

（彼が話したことをそのまゝに書く）

晴れた夜であつた。

眼にうつるものは、廣漠とした雪の原と、蒼白い月のかゝつてゐる、深い、大きな空であつた。その眺望は戰につかれてゐる彼の心に、甘い、やはらかな感情をよびおこした、けれ共、彼はそのこゝちよさを味はふことが出來なかつた、彼はある使命を持つてゐた。彼の心は暗く、さみしく、嚴粛なものにみたされてゐた。

食糧が缺乏したゝめ、三十餘名の浦虜を銃殺することにきまつたのは、その前夜であつた、それは上官の一言できまつた、そして二十人の味方と十人の捕虜が一團となつて、三つの別々の途に向つて出發した。

『何處へ行くのです。』と、捕虜がたづねた、

『隣村へ行くのです。』その答はやさしかつた。

途々味方の人々は澤山の冗談を言つた、しかし、捕虜は一人も笑はなかつた。

三十人の靴の音が、雪の上でなつた。その音は異樣な不安を凡ての人に與へた、人々は美しい夜の空を見なかつた、そして今は誰も語るものがなかつた、もう噓を言ふことが、味方の人間にも恐しかつた。

幾哩歩いたらう、彼には非常に短かい時間のやうに思はれた。

突然、恐しい沈默が破られた。一間ばかりはなれた前方で、『アー』と後尾のながい、呻くやうなためいきを、彼はきいた。と、一人の捕虜が雪の上に膽いで神の名を呼んだ。

列は忽ち崩れた、神の名を呼ぶかなしい聲が、十名の捕虜の口から洩れた、それは、あはれにも恐しい人間のうめき聲であつた。

『打てッ、打てッ、』と、

次の瞬間、彼は、狼狽した軍曹の命令を後方にきいた、銃砲がとゞろいた、白煙がパァッと舞ひ上つた、そして十名の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

血にまみれた死骸が、神を呼ぶ聲をのこして、雪の上に横はつた。
あゝ、この恐しい瞬間、彼は、自分の殺した捕虜が、美しい空に兩手をのべて、神の名を呼んだかなしい眼を見た。

（二二、一一、四）

コスモポリタン

――童話詩――

佐々木孝丸

コスモポリタンは生れた家を知りませんでした。
コスモポリタンは父を知りませんでじた。
コスモポリタンは母を知りませんでした。
コスモポリタンには然し、大勢の兄弟がありました。
コスモポリタンは默々と大地を踏みしめて行きました…………
田園の白亞には呪ひが巣喰つてゐました。
コスモポリタンは然し、この呪ひの下に飽滿が戯れてゐるのを見ました。そして飢えが睨んでゐるのを見ました。
このとき、祝福されてあつたものは圃の上を舞ふ雀の群でありました。
コスモポリタンは默々と大地を踏みしめて去りました…………
コスモポリタンは默々と大地を踏みしめて行きました…………
蒼空を衝く煙突の煙は怨恨でありました。
コスモポリタンは然し、この怨恨の煙の下に大樓閣があるのを見ました。そして、豚のさゞめきが猫の嬌聲と共に窓外へ流れ出てゐるのを聞きました。

牙を磨いだ蠻犬の群が、窓の下へ押し寄せてゐました。

併し樓閣の頂上には、權力を誇る獅々の鬣が搖れてゐました。

このとき、祝福されてあつたものは樓閣の頂上に糞を落した一羽の鳥でありました。

コスモポリタンは默々と大地を踏みしめて去りました。………

黄昏は、田園を侵し白亞を包み、また、街に流れ樓閣に肉迫して、淡紅色の壁の面にも突き當りました。

印度亞麻のKarteaoが微かに搖いだとき、窓のガラスに白い聲がありました。

——ワグネルなんか古いわよ。

——よくつてよ、あなたの新しいのは分つてゐるから。

鍵盤の上に白い指が走りDiamantoが大げさに光りました。不思議な音……

コスモポリタンの耳には然し、ワグネルのTalentoは感じられませんでした。コスモポリタンがその不思議な音に見たものは、樂器製作所の黒ずんだ青い服の塊でありました。

コスモポリタンは默々と淡紅色の部屋を去つて階段を登りました。

歴史の堆積の中に、廣い自然の呼吸と生きた人間の血とを忘れたものゝペンが動いてゐました。

——私の兩親は誰ですか?

コスモポリタンが訊ねました。

ペンを動かすものが、顔を擧げてコスモポリタンを見ました。

——私の兩親は誰ですか?

コスモポリタンは重ねて訊ねました。

けれども、歴史の堆積の中でペンを動かすものは、生きたuniversoを忘れたものゝみに冠せられる學者といふ光榮ある名の所有者でありました。

學者とは無智なるものゝ謂でありました。

無智なるものに問ひを發したのは然し、コスモポリタンの誤りでありました。

ペンを動かすものはそゝくさと歴史の堆積の中を渉りました。(淡紅色の部屋の不思議な音に耳を貸しつゝ)

歴制と僞瞞の連鎖が、叛逆の文字をぐる〳〵と卷いて、絶望の頁へ追ひやつてゐました。

――權力は正しい。正しいものは滅びない。滅びないものは絶望の頁から離れる。

歴史の堆積の中をそゝくさと渉つた無智なる智者が、斯う考へました。そして云ひました。

――君の兩親は絶望だ。

コスモポリタンは無智なる智者の傍を離れました。

――○○は正しい、絶望は希望である。君の兩親は希望だ。

階段を下りる時、淡紅色の部屋のピアノが斯う叫んでゐました。コスモポリタンはこの叫び聲の中に、樂器製作所の蒼い顏の脂汗を嗅ぎました。

このとき、呪はれてあつたものは、無智なる智者と、日光を離れ空氣を離れた藝術家の群でありました。

コスモポリタンは默々と大地を踏みしめて去りました。

悲しく響き渡つたのは斃された犬の聲でありました。更にもつと悲しく響いたのは斃した犬の聲でありました。

犬は共に犬でありました。その間に怨恨も呪咀もありませんでした。

鬪かはない犬は飼ひ主の手によつて斃されました。

然し、飼ひ主に斃されても鬪かはない犬がありました。

――が、兎も角、この犬達は飼ひ主から食を與へられてゐる。

見物の一人は感傷的に斯う云ひました。

コスモポリタンは默々と大地を踏みしめて行きました。

騷がしい限りの野でありました。

空を飛ぶもの、地を穿つもの、地を匍ふもの……全てが無智なる智者の作つた文明でありました。そして此處にも、權力と僞瞞の連鎖が限り無く輪を畫いてゐました。

コスモポリタンはこの連鎖から顔を外向けて大地の底に見入りました。
底の火は刻々に勢を増してゐました。
――時が來なければこの火は地上には現れない。
斯う、無智なる智者のうちの一人が云つたことがあります。コスモポリタンは然し、底の火のために、大地の上へ裂け目を作るのは、地に住むものゝSderoであると考へてゐました………
騒がしい限りの野でありました。
コスモポリタンの見たものは、兄弟の心臓から迸り出る眞赤な文明呪咀でありました。
兄弟が兄弟の上に倒れかゝつてゐました。
――兎も角もこの犬達は食を貰つてゐる。
此處では誰も斯う云ひませんでした。
――お前は何をしてゐるのだ？
コスモポリタンが斯う一人の兄弟に訊きました。兄弟は默つたまゝ、自分の身を包んでゐる無智なる智者の作つた文明を示しました。
このとき、祝福されてあつたものは、眞に智識ある無智者の群でありました。
騒がしい限りの野でありました。
無智なる智者の作つた鐵と火は、密集する兄弟の群を土に返へしてゐました。
怨恨の眞赤な滴は、大地の底へ浸み入つて、其處に燃えてゐる火の上へポタ／＼と落ちかゝりました。
底の火は眞赤な滴を受けて、益々勢を増しました。
然も無智なる智者は、未だこの地底の火の勢に氣付きませんでした。
このとき、呪はれてあつたものは、騒がしい限りの野を遠くに眺めて、その叫びとその血とで腹を肥やしてゐる一群の野獸でありました。
野獸の周圍では、野獸の保護を受けた無智なる智者の一團が、又新たなる文明の考案に耽つてゐました。
コスモポリタンは急ぎ足に騒がしい限りの野を去りました………

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

コスモポリタンは急ぎ足に地上を驅けめぐりました…………

龜裂は到る所に生じかけてゐました。

地底の火の煖かさが、足の裏に感じられました。

白亞に巣喰ふ怨恨と飢ゑとは、ぢりぢりと飽滿を取り圍んでゐました。樓閣の窓際に押し寄せた猛犬の群は、頂上の獅子が下りて來るのを待ち構へてゐました。

狼狽は無智なる智者の群を湧き立たせました。

――太陽に祝福あれ！　大空に祝福あれ！　大地に祝福あれ！　然して、全て無智なる智者の作つたものに禍ひあれ！

コスモポリタンは斯う叫びながら地上を驅け廻りました…………

地底の火が噴出したとき、怨恨と飢ゑが飽滿に克つたとき、猛犬が獅子を斃したとき、禍が全てのものゝ上に下りました。そして然も祝福が全てのものゝ上にありました。

騷がしい限りの野は和かな限りの野になりました。

このとき、コスモポリタンは忽然と亡くなつて了ひました。全き世界が、たつた一つのNacioだからです。

――二一・一一・九――

—その夕の地平線上—

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

—この若き兵隊さん—

露西亞革命と婦人

山川菊榮

露西亞には女權運動はなかつた。

階級意識は、階級的壓制の度によつて强くなるものである。帝政時代の露西亞では、男女は同じく壓制迫害の下におかれ、婦人の權利は、元より云ふに足りないものであつたが、男子の權利とてもそれに大した變りはなく、隨つてその間に著しい不平等は感ぜられなかつた。男女各々の異なる苦しみは、一つの階級としての苦しみの中に吸ひ込まれて居つた。露西亞の鬪ひは、男子として、女子としての人間の鬪ひではなくて、たゞ一般に、人間が人間としての自由のための鬪ひであつた。

テロリストの時代には、婦人・男子と等しく、〇〇〇投げる權利を求めた。これは彼等に許された。政府もまた、依估贔屓なく、男子にも女子にも平等に、懲役や、シベリヤへの流刑や、絞首臺に登る光榮をさへ與へた。婦人はその兄弟と同じく、勇敢に、熱心に、主義のためにその力を盡くし、血を流した。

露西亞が自由になつた時、何人も婦人が男子と等しく、その自由に浴すべき權利を疑ふものはなかつた。婦人は女權論者なる代りに、カデットとなり、社會革命黨員となり、メンシエウイキとなり、マキシマリストとなり、ボリシエウイキとなり、インタナショナリスト(ゴルキーの屬した小さな政黨)となり、さうした政黨若くは政黨の影ン法師の仲間入りをた。

革命は、戰爭が露西亞の婦人に負せた重荷を、その背から減しはしなかつた。國内の組織が知れるに伴れ、婦人は家族を餓死から救ふために、益々努力しなければならなかつた。彼女等は畑を耕し、家畜の世話をした。彼女等は街路を掃除

し、鐵道線路を修復し、更に我子のミルクとパンとを得るために、食品店の前に長いこと立ち盡さねばならなかつた。婦人の唯一の希望が、〇〇の成功にあつたことは、男子と變らはかつた。然し婦人は男子のやうに、それを口にする時間はなかつた。彼等は、或は工場からなだれ出して街路を練り、或時は將に劍を執つて戰はうとまでした。彼等は、戰時中、無言の勇士であつたやうに、〇〇の無言の勇士であつた。彼等は泣くべき理由は澤山あつたが、涙を流してゐる暇がなかつた。

婦人の中で顯要な地位に上つたのは、五人だけであつた。それは、カテリン・ブレシコフスカヤ、マリー・スピリドノワ、バニナ、コロンタイ及びビツエンコであつた。

ビツエンコはブレスト・リトウスクの講和締結委員の中に選ばれた唯一の婦人であつた。講和委員がペトログラードを出立して數日後まで、私は其中に婦人がゐたといふことを知らなかつた。R氏は或朝、偶然それを話した。

『え、女が講和委員の中にゐたのですつて？　何故もつと早く知らせて下さらなかつたのです？』と私が驚いていふと、彼は答へた。

『何故つて別段譯はないんです。私は一向氣にとめてゐなかつたものですから。』

これは露西亞人に通有の態度である。婦人が顯要の地位につくのは、誰にとつても驚くに足らないことなのである。婦人も性別を念頭に置かぬと同じやうに、男子も全くそれに無頓着である。

（ベッシー・ベアティー女史著『露西亞の赤い心臓より』）

革命家を取扱つた最近の創作

――原首相と菊池首相――

藤井眞澄

藝術は我々に取つてあそびであると同時に生命の伸張である、汚れた魂の洗濯であると共に殺されかゝつた生命の復活でもある。いくら日本の文壇がやくざだとは云へ多少は我々をあそばす物はあり、僅かでも魂を慰めるものはあらう。が、

行止つた我々の生命を進めるものは見當らなく、絕えかゝつた命を再生さすものはなか〳〵ない。そこで藝術に對する命がけの期待は思ひ切られて、失望となり果ては立腹となつてゐるのが、今日までの我々の事實である。が、最近時々我々をして、いくらかなりとも文壇に親みを有たせ、滿足を感じさせるものがある。それは革命家を取扱つた創作だ。中村吉藏氏の「大塩平八郎」三島章道氏の「寺田屋騷動」と三人の兄弟」菊池寛氏の「蘭學事始」「入れ札」「船醫の立場」などがそれである。

中村氏の「大塩」に就ては度々云つたから玆では云はぬが、僕はあれを讀んで涙を流したと云つて、方々から叱られたり笑はれたりしたものだ。何處かで早く舞臺に上せて、もつと泣かさせて貰いたいと思つてゐる。

三島氏の「寺田屋騷動」は明治維新に於ける薩藩中の、過激派と漸進派の爭ひを書いたもので、今日の我々の生活からすると總て單純ではあるが、讀む間に三度ばかり涙をにじませてくれた。こまかに事情は違ふが、其事情を生んだ因果關係や革命心理に、共鳴するものがあるからであらう。之を讀んで一番有難いと思つた事は、今日の日本の上流階級の或者に維新當時の革命家の血液が、どれ程遺つてゐるか？　そしてそれが今後の新しい創造建設にいかに役立つか？――といふ事は注意しなくてはならぬぞ！　と我々を氣付かせてくれた事である。三島氏は「私はまにあはせ者です」と謙遜するのであらうが、然し其「まにあはせ」も、解釋しやうでは、頗る大きい自負があるとも見られる。たとへ普通に解釋しても、それを破つて飛躍する素質がありさうに思はれる。ありさうに考へさせられただけでも、我々には大きな得だ。何等の創造も飛躍もありさうにない若き人々をどつさり見受ける今日の文壇、特に劇文壇では、一層嬉しい氣がする。

菊池氏の「蘭學事始」では所謂先驅者の創造の苦しみと樂しみを、息もつけない緊張力で感じさせられ、「入れ札」では謀叛人の落ち行く淋しい心持に共鳴を覺えさせられた。「船醫の立場」は若き革命家が新しい創造に努力する事實を巧みに列べて行つて、終いになつて第三者である船醫の方へ其テーマを逃がしてはあるが、然し其革命家の苦しいみじめな努力の中に、我々の涙をにじますものがある。流石文壇内閣の首相と噂させられるほどの人の作であるなアと感服する。それにつけても思ひ出されるのは、政治内閣に於ける原首相の政治材料を取扱ふ態度、特に革命的材料を取りこなす巧みさと、菊池文壇首相のそれとのよく似てゐる點である。原氏がいかに面倒な事件でも、結句、内閣の長命といふ目的の爲めに、かる〳〵と料理する落付いた聰明な態度は、菊池氏がどんな題材でも自分特有のテーマに容易く料理する落付さと利口さとに、そつくり其まゝである。そこには兩大立者に共通な、時代と社會の或る影が面白くうかゞはれる。玆まで來た序で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だから云ふが、原氏の白紙主義は菊池氏の趣味本位に、前者の國家維持は後者の文壇擁護に、その憲政有終の美の理想は此の藝術獨善主義にこ、夫々あてはまつてゐると見られる。そこには兩者とも少しの夢がない、才智の人であり、何處までも現實主義者、凡俗本位である。二人ともコツ〱と中流からたゝき上げた好運な立身出世の人である。舊閥族思想ご學び新民衆運動を抑へ、上ブルジョアと下プロレタリアとの間にあつて漁夫の利を占める、何處までも日本式デモクラシーの人である。菊池氏のあの態度やその材料の原本が外國にあるとの噂さがあるが、若しさうだとすれば、それと同じ程度で原氏にも或る外國の政治家があるであらう。それにしてもそれを日本式に活かすうまさは、兩者共同じである。歳を取るに從つて其うまさが一層見事になる事は云ふまでもなからう。然し、原氏が何處までも功利的唯物主義の超人のやうに見られてゐるのに較べて、菊池氏の作物には、たとへ常識以下の頗る淡いものではあるとは云へ、良心或は誠心といふやうなものが見えるのが、一寸と違つた感じを抱かせるが、それは政界と文壇との相違で、とゞのつまりは自己の世間的壽命維持の爲め(政權の獨占と稿料の收入の爲め)の、意識的な或は無意識的な、保護色であり武器である事に終るのは、いつさい同じである。兩者の關係の由來因緣をもつと詳しく考へて見ると面白ろからうが、玆では兩者の革命的材料をこなす巧みさ利口さと、將來に飛躍する有望さかげん、そしてそれに對する我々の要求も、みな同じ意義のものであるのを、特に云つておくに止める。

さて本論に還つて、以上の作品は理想的なものかと云ふに、決してさうではない、不滿な點が澤山認められる。が其くせ僕は涙を流してゐるのだ。一切の現狀に對して冷酷無殘を眼をひからかしてゐる我々も、革命家の生活さへ描いてくれゝば、それがたとへ下手であつても、直ぐ共鳴を起してお人好しになり、安價な涙を流すのださも云へる、それ程苦んで居り、抑へられて居り、飢えてゐるとも云へる――我ながら嬉しいやうで可笑しいやうで阿呆のやうだ。

以上の作品みんな過去の日本に於ける革命家を取扱つたもので、今日只今のものではない。過去のものにさへあんなにあまい我々だから、若し現在の我々を描いてくれたら、どんなに宇頂天になる事が……。そこには所謂プロレタリア藝術を主張する社會文學者勞働文學者なるものが居るつもりであらうが、少くとも今までの者にはろくな物はなかつた。あそびとして恍惚感に入れる力も、生命の糧となる力も、一般文壇の物に較べてだいぶ劣つてゐた。若し眞のプロレタリア藝術なるものがあるとすれば、彼等はそれを十分恥めしめるに足るものであつた。が、彼等は序幕であり第一期であるとすれば、その存在も保たれない事もなからう。いづれにしてもこれから生れる眞の藝術家が、現在及び將來の革命家日本人を

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いかに表現するかといふ事は、あらゆる意味に於て、過去の藝術上の恥辱をぬぐふものであり、將來日本人が果して新世界の創造建設に堪え得るか何うかといふ事を豫言するものでもある、あらねばならぬこ思ふ。現在及び將來に生きる革命の日本人を描いて、我々の魂を醉はし、行止まつた生命を解放してくれるやうな、偉大な藝術が出現する事を切に〳〵祈るものである。

この感想を書いて十數日の後、菊池首相は將棊をやめて社會問題研究の爲めに洋行するといふ報が通はり、其翌日になると原首相は中岡艮一君の鋭い匕首に刺されて永久の旅路に出發さるとの知せがあつた。筆者こして多少の感慨なきを得ない。兩大立者が一時に去つて、今後其比較研究をする事が出來なくなり、この短文か一人を送り一人を弔ふの記念となつた事を、頗る遺憾に思ふ。

原首相のは歸らぬ旅であるから致方もないが、菊池首相のは前途多幸の旅であるらしいから、序でを以て一言申述べたい。即ち、テーマ小說や小說家協會を拵へては金を儲けて將棊をする事を止めて、社會問題研究に洋行するといふ事は、頗る非常に歡迎すべきであるのは云ふまでもない。然し、社會問題はわざ〳〵外國にまで行かなくとも、此土地で十分研究出來る事ではあり、いくらショーやブリユーに會つても日本式人情味の古い頭では、なんの役にもたつまいと思はれる。それよりも、なぜ自分はテーマ小說を書くのであらうか？　其の自分は何うして生れて來たのが？　其自分を生んだ此時代こ此社會の眞實はいかゞであるか？　その眞實を生んだ日本人の生命はどういふものであるか？——といふ事をよく〳〵觀測內觀して貰ひたい。即ち、出來るだけ自己反省と個人革命をやつて、それから日本なり外國なりの社會問題を研究して貰ひたいのだ。依然たるブルジョア漸間の古い頭を有つてゐては、何處へ行つたつて何時になつたつて、社會問題にしろ何にしろ、本當に徹底出來るものぢやない。恐らくテーマ小說テーマ芝居の例の材料を、今までより澤山持つて歸るこいふ事が、お芽出度いおちとならう。（大正十年十一月六日追記）

Digitized by Google	Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

保證人

吉田金重

一

支那鞄を背負つた彼は、電車にも乘らずテク〱歩いた。と言つて彼には、行き着くべき先はなかつたのである。けれども彼は、紺の暖簾に男女口入屋と白く染め出したり、白いペンキ塗りの看板に雇人紹介所と書いたのを見つけると、ほとんど本能的にそれに近よつて行つた。そして、そんなものを吊り下げた家が大きからうと、小さからうと、立派であらうと、汚なからうと片つぱしから這入つて行つた。しかし、それは一瞬間であつた。彼は萎れ返つて出て來るのであつたけれども彼は、屈しなかつた。砂埃りは彼の疲れた足から、着物のすそへかけてまつ白くした。それでも晩春のうらゝかな光線は、この少年の歩行を幾ら助けたか知れない。

彼はすべてが裏切られたことを思つた。彼は自分の希望の書生奉公はおろか、店員にさへなることが出來なかつた。頭の髮を角刈にしたり、コッテリ左分けをした若い番頭達は、彼を頭のてつぺんから、足の爪先まで見下しながら小莫迦にしたやうに、

「お前さんは、そんな氣の利いたことを言ふが、一たい市内に保證人でもあるのかい」と訊いた。さすがの彼も、これには口がつまるのであつた。まつたく彼には保證人もなければ、知己もないのであつた。

「廣い東京だ、何とかなるだらう？」と、彼はこんな茫漠とした考へのもとに、今度はじめて上京したのである。しかし、思惑はすべてはづれてしまつた。けれども、彼は後悔しなかつた。彼はどうしても辯護士の書生になり、法律を研究して偉い人間になり、故郷へ錦を飾らうとます〱決心を固めた。彼は曾てさうした人間のあることを人に聞かされ、年期中の親方の家を飛び出し、母の貯金を盗み出し、それを路用にして折角こゝまでやつて來たのだもの。それに彼は、今更おめ〱、故郷へ歸れないことを知つてゐた。彼は歩きながら元氣をつけるため、青年立志出郷關、學若不成死不還、埋骨豈歸墳墓地、人間所至在青山なぞと、繰り返し〱吟じた。

二

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たう／＼日は暮れた。それでも彼は疲れた足を引きづりながら、あてどもなく軒燈をたよりに街から街へと辿つた。彼はこゝが何と言ふ區で、何と言ふ町か更に知らなかつた。が、相變らず例の暖簾や、看板に注意することは忘れなかつた。彼は明るい電燈や瓦斯の點つた、美しいショーウインドなぞを覗き込みながら、思はず時を過してゐることがあつた。色んな風を裝つた花見歸りの都會人は、彼を路傍にぼんやりたゝづませた。彼はこの時、今夜泊る宿のことさへ考へてゐなかつた。

　ある街の曲角で一軒の口入屋を見つけた彼は、もう閉まつてゐる潜戸を開けて無理に中へ這入つた。

「辯護士の書生にでも世話をして貰ひたいんですが、あるでせうか？」と、彼はろく／＼挨拶もせずいきなりかう言つた。すると奥から怪訝さうな顔をして出て來た三十恰好の番頭風の男は、

「辯護士の書生だつて、何だつてあらあや。だが今夜はもう駄目だ。明日來い、明日……」と言つて奥へまた這入つてしまつた。

「どうしても、今日のことにはならん。だが泊るところはどこにあるのだらうか？」と、彼は奥の方をすかし見ながら呟いた。

「どこか、このへんに泊めてくれるところはありますか？」と、彼は大きな聲で聞いた。

「宿屋へ行きや、どこにだつて泊めてくれらあや」と、奥の方からかう言つた。

「宿屋はどこにあるんですか？」

「そこらあたりを歩いて見な、おつこつてるか分らねえよ」

「莫迦野郎！　宿屋はおつこちとつて堪るかい。へん」と思はず呶鳴りつけた彼は、いきなり潜戸を開けて飛び出したまゝあとも閉めなかつた。そして、彼は支那鞄をもとのやうに背負ふと、足に力を込めながらドツ／＼と歩いた。

　彼はいつの間にか隅田川の岸へ出てゐた。彼は田舍なぞではついぞ見られない、大きな川の水面をぢつと見とれた。そして、其の見とれた眼を次第に遠くに馳せた。美しい街の夜景はまるでこの川に反映してゐるやうに思はれた。

三

「君、君！」と、彼の背後からふいに呼ぶ者があつた。彼は默つてふり返つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「そんなところで、何してるんだい？」

「…………」

「君は何か仕事を見つけに東京へ來たんだらう？　どうだ、うまく當つたらう」と、知らない男はひとりで喋言つた。彼は怪訝さうに背後をふり返りながら、薄闇をすかして其の男をまじ〳〵眺めた。

「俺あ仕事を見つけるよりか、勉強しなきやならん」と彼は思つた。が、其の勉強はやはり仕事の暇々にやらなきやならん。辯護士の書生になると言ふのも畢竟一つの仕事に違ひない──さうだ、俺あまづ仕事を見つけなけりやあ食ふことが出來ない、食はなきや勉強も出來ない譯だ──そればかりではない、勉強と言ふのもやはり一つの仕事を得んがためだ、一つの仕事を得ると言ふこともやはり食ふことだ──彼はまづ何よりも食ふために仕事を見つけなきやならん、と言ふところまで考へを漕ぎつけて來た。すると、背後に立つてゐる男が、急に懐しいものになつて來た。

「君、田舍はどこだね？」と、知らない男はすりよつて來て訊いた。

「中國へん……」と、彼はあやふや答へた。

「中國と言ふと、岡山の方だね？」

彼はこの時、この男は俺のところをどつかで知つて、こんなことを言つてゐるのではないかなと思つた。彼は默つて其の男の丸い顏を見つめた。彼は別に惡い人間ではないと考へた。

「岡山へんからも、たくさんやつて來てゐるよ……俺の知つてゐる中で、相當な人物もゐる」と、其の男は空を見つめながら考へ出すやうに言つた。彼にはこの時、岡山へんから來てゐる、相當の人物と言ふ言葉が懐しかつた。彼は知らない男の顏をまじ〳〵眺めやつた。

「おつさん勉強するにや何かいゝ仕事はないもんだらうか？　辯護士の書生でもいゝが」と彼は其の男を口入屋の番頭と間違へてしまつた。彼はこの男は賴めば何かいゝ仕事を世話してくれるやうに思つた。

「いゝ仕事？　それやないこともないだらうが、君、東京に知人でもあるのかい？　辯護士の書生だつて保證人なしにやなれないからね」と、其の男はきつぱり言つた。彼はこの時、さつき口入屋で訊かれるごとに困つた答へを、こゝでも繰り返さなければならなかつた。

「うーん、さうか」と言つた其の男は彼の懐のあたりを探るやうに見つめてゐたが「どうだ、君は今夜宿屋へ泊る金を持

つてゐるのかい？」
「まだ五十錢ぐらゐある……」と言つて、彼は懷から布の財布を出して探つて見た。
「五十錢ぐらゐで宿屋へ泊れるかい」と言つた其の男はちよつと空うそぶいたが、やがて「ぢや俺が安い宿へつれて行つてやらう」
彼はホッと息を吐きながら、知らない男のあとについて、色んな街を幾曲りもした。

四

彼は其の男の世話で、たう〳〵石版屋の見習職工になることにした。
「まあやれるかやれないか、二三日やつて見ろよ。それでやれるやうだつたら、俺があらためて保證人になつてやるから」と、宿屋を出る時其の男は親切さうに言つた。
「ぢやおつさん、支那鞄はこゝへ預けておいてもいゝかい？」と訊いた彼は、下駄箱の脇に立てかけてある、色んな法律書や、英語の本なぞの入つてゐる白い支那鞄を殘り惜しさうに見やつた。
「あゝ、いゝとも〳〵。俺がたしかに預けておいてやるからな……それで辛抱出來るやうだつたら持つて行つた方がいゝよ」
彼は其の男の言葉をすつかり信用してしまつた。まつたくこの廣い東京に誰一人として知人のない彼は、この男でも信用してたよらなければ、他に力になつてくれる人間はなかつたのである。
「まあどつちにしても、暫らくそこに辛抱しとろよ。其のうちに辯護士の書生か、學僕と言つたやうなものでも見つけておいてやるから」と、其の男は薄い髯をひねりながら歩き〳〵言つた。
「さうしてくんなよ。僕も職工なんかになるなあいやだから」と言つた彼は、職工なぞになるなら以前の親方の家で辛抱してるも同じだと思つた。
二人はいつの間にか石版屋の前に辿り着いた。
「私の田舍の親族の者ですから、どうか一つお願ひします。いづれ二三日のうちにあらためてお伺ひいたしますから」と頼んだ其の男は彼の方に向ひ「なあいゝか、辛抱しなよ。二三日したら來てやるからな」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「ほんとうに來てくんなよ」と、彼は入口を出て行く男に追ひすがるやうに言つた。

彼は頭の髮を左分けにした番頭につれられて、眞の工場へ這入つて行つた。彼の未だ曾て見たことのない幾つもの機械は、それ〴〵の職工の手によつて八釜しい音響を立てながら動いてゐた。番頭は主任のやうな職工服を着た男に賴んでおいて、其のまゝ出て行つた。

彼は人のよさゝうな主任の言ひつけで紙を運んだり、仕事のすんだ石版を金盤と金剛砂でザア〳〵こすり廻したりした。夜になると彼は他の見習職工達とゝもに、工場の二階へ上つて無駄話しに夜を更かすのであつた。併し、彼にとつてこんなことは弟子奉公中もう馴れ切つてゐることであつた。で、彼は一日々々、それらの仲間に親んで行つた。彼はもう辯護士の書生なんか、どうでもよかつた。

其の男は二三日たつても四五日たつても、やつて來なかつた。番頭はある朝彼を呼んで、どうした譯か訊いた。が、彼にはどうとも答へることが出來なかつた。

「とにかく、君行つて呼んで來たらどうだい。さうしなきや、こつちも困るから……こゝぢや保證人のない者を使ふことは出來ないことになつてゐるんだ」と言つた番頭は、緣なし眼鏡の奧から彼を見つめた。

彼は仕方なく、宿屋へ其の男を訪ねて行つた。すると色の黑い主婦は、帳場に肱突きをしながら訝しさうに、

「そんな男は知らんよ、だつてこゝにや色んな男が出入りをするからね」と言つた。

「ぢや俺の支那鞄がこゝへ預けてあるだらう？」と、彼は情なさうに訊いた。

「そんなものは預らないよ」と言つた主婦はちよつと小首を傾け「さう〳〵、十日ばかり前にそんなことがあつたつけ。だがあれやすぐ翌朝持つて歸つてしまつたよ」

「誰が持つて歸つたの？　どこへ持つて歸つたの？」と、彼は急き込んで訊いた。

「誰か持つて歸らう、預けた人間に決まつてるぢやないかね」と、主婦は突つ返すやうに言つた。

「だつて、だつて、それや、俺が預けたんぢやないか。俺は持つて歸れやせんぜ」

「そんなことを、こつちとらの知つたことかい！」と叫んだ主婦は立ち上り、其のまゝ奧へ這入つてしまつた。

――一九二一―一一作――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てうど其の時此の奴隷小舎で、又馬鹿騒ぎが初められるのであつた。

そこには俺と合せて八人の社會から掃き捨てられた連中がゐたのだが、彼等は金も友達も無いので外出することを嫌つて（もつとも街から小一里も隔れてゐたせいもあつた）、仕事から歸ると、下らないいろ話を初めたり、曾て味つたよい生活に就いて話したり、次に飛び去るべき工場の話をしたりして、蚊や、蚤や、南京虫に攻められながら宵の口を騒ぐのだ。

此の頃はそんな雜談で、俺が世間に對する眼を大きくして與れない代りに、音樂に對する趣味を與へて與れてゐる。併し向うは八人、こちらは一人なのだから、讀んだり考へたりする邪魔になるといつて、喰つてかゝるなんて出來ない。どうせ統一のない雜談にしてもろく〳〵本を讀むことが出來ないのであるから、でも考へた。『こんな風にあたまに這入らないのに本を讀んだつて大事なあたまを疲らせた上にあいつらには不愉快を與へるほかに效能がありやアしないそれよりやアあいつらの自棄糞交りにならざるを得ない心がわかつてゐる人のやうにお交際をしてやつた方が自分のためだらう、さうすればあいつらだつて俺の本を讀まねばならない心ゐも察してくれるだらう、其の社會に這入つては、其の社會の習俗に從ふといふことも、人間生活の上でお互ひが親和に對する一つの方針として必要だ——。』

此の考へに引出されて、自分の其の同化を、心弱いことだ、何も惡に同化する必要はない、それよりは彼等を高尚な智的の會話とか運動とかに導いてやるのが本當だとは思ひながらも、救ふことの出來ない彼等の團を見渡すと、其の自棄糞交りの心と抱擁すべく仲間の一人とならずにはゐられないのであつた。

何しろこゝは巡査の來ないところなのだ、或る者は素裸體になつて、或る者は襯衣だけで、悉ては趺坐で、薄氣味の惡い埃變の上に圓を描いた。さうして俺を呼んだ。『おい北見君、來てやらないかい？』

『よし！』

さういつて俺は本をぱくりと大きな口を開いた寢根に押し退けて佐山の隣りへ趺坐を搔いた。佐山は絶えず屈辱を感じて

ゐるぐうたら奴隷だが此一座が組まれる瞬間には、落つことした智慧の實を眼に拾つて來て七人を眺め廻した。その眼には臆病者に似合はない力があつた。それは彼が八木節で皆を征服出來るからである。彼はよく軍歌をうたひ、浪花節はよくうめいた。皆がうたふ歌は初めからきまつてはゐなかつた。誰でもうたひ出した歌に皆が相和して行く樣である。

やがて皆は吠へ歌つた。或る者は其の音頭を取るために、自分がたつたいまさきまで使つて煙管を持つて、煙草盆代りに工場から拾つて歸つた、事務員の捨てたらしい罐詰めの空罐をがちやん／＼とひつ擲いた。或る者は調子に乘つて、扇子で自分の膝を赤くなる程叩き／＼した。或る者はさうした樂器がないので掌を打つた。

俺は『そりや――あ。』とか『これや――あ。』とか皆を威勢づけながらもいつしか文子の影像を眼に浮べて自分を責めてゐるのだ。

『こんな態をして！　こんな下らない集團に加はつてゐる自分が、歸宅後は父や母や弟二人のものを洗濯して、疲れてゐるにも係らず讀書したり、靜かな話を交へてゐるであらう文子を戀人として相應しいであらうか！　彼女の戀人であるなれば、この馬鹿騷ぎに背を向けて、一心に地位の向上を思つて讀書してゐる無口な青年であらねばならぬ。或は土手に出るか曠野に出て、自然や人生に就いて深く考察を巡らしてゐる青年であらねばならぬ。』

さうは思ひながらも、世の中の虚禮虚飾を嘲るかのやうに、或は地位を吳れずして、靜肅とか、謹嚴とかを求めやうとする正しい人々を辱めるかのやうに、聲を限りに吠へ立てゝゐる仲間の眼の中に何があるか、其の口から何が吐き出されてゐるのかと思ふと、俺はそれと連れ添つて自分の口から迸り出る聲と思ひを取返すことが出來なくなつてしまひ、騷がずにゐられないのはもつともぢやないかといつた顏をするのだつた。皆が皆、心を一つにして或る一事に向つたならばかうした安全瓣の使用はゐらないであらうが悉ての者が、資本主義の暴戾に怖ぢ恐れて、孤立して、互ひにこんなことで、不平や壓迫から退れて、詰らぬ小康を求めてゐるのである。それは誰を責むべきでもない。それは賃銀奴隷一同の責任なのである――といふよりは責めは資本主義の弊害にあるのである。

何事が起つたかと思ふやうな聲を聽いて、時偶土手を通つて行く通行人が、ふとこちらを振り向く。初めはこの何の飾りもない、窓の開けつ放しになつた室に、これは珍らしい人間の輪飾りを見て、『おやッ！　あんなところに人間が住んでゐるぜ、どこかの工場の職工か知ら。』と我を忘れるのであるが、此の有樣を見ると、呆然自失した彼等から笑ひ出して、『むちや苦茶なてあいが揃つてゐる……。』といふ眼に見返りながら、土手を何處へか行つてしまふのだ。さうして、永遠

に去つたり、或は再び現れたりした。すると皆土手を通つてゐる人に笑ひかける、といふよりは阿呆になつた自分自身笑ひかけるのである。

次第々々に土手の上の櫻の樹は、鼠色の黒影を小暗くなつた自分の幹の下に敷き出す。さうして太陽に接吻された、樹、家、河はこんどは微風に撫でさすられて、やがてこゝろよい眠りうたを聽くのである。

さうしたうたが初らうといふ頃には、もう通行人はおろになつてしまふのだが、いまはぼつ〳〵あるのである。

小舍の屋根が脱け飛びさうな喚き聲は、自分の軍歌を除くほか悉て淫猥な流行歌であつた。彼等は町に出る度にそんな歌の本を買つて來てはうたふ。

皆は疲れてうふたのを止めたが、佐山丈は止めなかつた。彼は自分の周圍にごろ〳〵と寢そべつたり、窓に倚つて土手の通行人を眺めたり、土手にしやがんで、蚊をいぶすべき青草を取つてゐる男を征服したやうに見渡した後、汚れた本を顏に近附けて、何時もだらりと垂れ下つてゐる唇を引緊めて、おはこの八木節をうたふのであつた。

さても一座の皆さん方よ……。てまへみたよな、鹽辛野郞が……。

こんなに歌ひ出すのであるが、格調が馬鹿に民衆的であるのと、節の文句が、如何にも虐げられた人が、虐げられた人にうたつて聽かせるやうな呪咀と怨恨との中にも人間の美性、善性を摑つて行くといふ順序なので、こんなに彼がうたふのであらうと思へた。自分自身を何處にも表現することの出來ない弱い人達は、かうした消極的手段で、滿足するよりほかないだ。

突然、俺に『その寫眞を呉れたよ』と紡績女工の話をしてゐた小森が吠へた——『佐山君、もういゝ加減で止せや——。』すると俺の笑つた顏を見て、俺と同じやうに小森の話を一膝乘出して聽いてゐた中山が佐山を呶鳴り付けるべく眼を光らした。『止せ、止せ！』苦々しげに叱つた。佐山は怖れの眼で二人を見た。さうして聲を箱の中に入れられたかのやうに小さくしてしまつた。しかし、それから暫らくして浪花節が廢頽的な聲を上げて、『五郞正宗』を吠へ出したには、誰も文句をいはなかつた。俺はかうした虐げられた者の集團の中にもなほ強者と弱者のあるのを思つた。

土手で青草を抱へて、小便をたれてゐた男が室に這入つて來た。『さァいぶすぞ、おい誰かまつちを貸せ——。』と彼はいつた。

まつちは與へられた。土間に投下してゐた火鉢の上に青草は白烟りを上げて其の烟りは天井の無い屋根裏へ呑まれて行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

く。蚊は窓格子から往復した。草が暫らくの間燃えもせずに執拗に白い烟りを上げる。

俺は猿又一つでそのわきに頬杖を突いて、淋しくてならないので、皆と同じやうに土手を通る通行人共に眼を呉れてゐた。皆は眼を光らせて若い女の通るのを待つた。若い女でも通らうものなら、浪花節が直ぐと、『いよお姐さん……こんちや。』と銅板でも叩くやうな聲をいきなり振上げた後急に銀鈴でも振つて見せるやうな變竹な聲を出すので、女はもとより皆もゲッと笑ひ出すのであつた。さうして女が耳朶までも赤くして、とても耐らなくなると駈け出す。と二人も三人も大聲で其の後から追駈ける。俺も時々女を悦ばすことが出來るなれば揶揄ひかけた。俺達を知らない女こそさうしたことに侮辱を覺えるのである。俺達の心をよく覗いて呉れ、而してそれを微笑んで呉れてゐる女は、何等侮辱を感ぜないのみか、ごく小さい範圍でしか慰められない男を慰めてやつたことを悦ぶであらうから。

しかし、こつちを見ずに顔をそむけて通つて呉れる人もあつた。それが俺達を侮蔑してゞないとわかつた時はどんなにか自分等が動物的であること、彼等の良心を苦しめてゐること等を思ひ起して、自分自身に鞭を打ち彼の謙讓に感謝して頭を埀れるのであつた。

なかにはこんな人達があつた。自分等の一團を覗いた其眼はまつたく田舎者が上野へ散歩に行つて、動物園を覗くやうな眼付きだ。『一切の責任はお前達だ、お前達は自業自得に陥ちてゐる。』といつた眼付きだつた。自分の優越感を示す眼付だつた。こんな種類の奴には眼で挑戰すまいと思つても自分のほかの良心が赦さなかつた。

『おい、君。不思議かい、こゝにかうした人間がゐるのに何か不思議かい。餘儀なくされてゐるんだ、世の中がさうさせてゐるんだ——君だつて世の中の型に嵌つた人間ぢやないか、こつちとらより少し上の奴隷に過ぎない癖に。こつちとらが若し君の眼には人間と見えねえのなら、おんなぢことさ——君だつて、こつちとらの眼には人間と見えねえのだよ。フン、小悧口な動物！』

俺はかうした言葉を掛けて眼を其の人の動物的の顔から放さなかつた。無理解と憎悪とで、お互ひ人間が同胞の眼を傷付け合ふのだつた。

やがて土手が暗くなつて通行人が全くなくなつた。汚れた座敷の便所に這入るのは厭なものだから、皆、土手の雜草にいばりをしては室に這入つた。同じい蚊帳の中に雜魚寢をするのだつた。

『今夜返事を書いたか知ら？　今夜書いたらあすはどうかして俺の手に渡してくれるにちがひない——』

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

俺は佐山と一つ布團の下に寢せ付けられて、文子の父や、母や、二人の弟の顏を、文子から受ける感じを持つて想像して見た。奴隷小舍や、雜魚寢をしてゐる仲間達は、俺にいひ知れぬ屈辱を與へた。

『もう文子を戀人に持つやうになつたら決して馬鹿な彼等と交るぢやァない。交つても俺の方へ彼等を引上げる、憎まれたつてかまはない文子が慰めて吳れる。俺は善良な青年にならう、さうでなくして彼女に一指でも觸れて見ろ――俺は俺を赦さんぞ!』

俺はさう思ひながら、佐山の石のやうな顏を見てゐる中に、つい眠くなつた。俺は蚊帳から出て、仲間が閉ざした雨戸を二尺ばかり開けて、又自分の席に戻つて寢るのであつた。

俺は眠りに陷ちかけると慌てゝ此の窓を開ける癖があつた。何故かといへば、水害の罹災民でも詰込まれたやうに雜魚寢をする俺達は、暑苦しくて夜がろく〳〵送られないのである。それに、俺は土手から吹込む靜風に、垢の臭氣で鼻の歪むやうな布團の臭氣や、不潔な仲間の鼻や口から洩れる臭氣などで、空氣の汚濁した室を、吹拂つ　貰ふ光景を、想像せずには寢られなかつたのだ。が、俺の兄弟達は、何も盜られる心配が無い癖に雨戸を繰らずには寢なかつた。雨戸を繰るのが罪惡と思へば當り前なのであるが、彼等は繰らない方が罪惡であるかのやうに、職工長に敎へられてゐる樣である。

時々職工長は小舍を見舞つて、『ゆふべ窓を開けて寢てたが誰だ?』と問ふた。

『僕です。窓を開けて寢てはいけないんですか君、な――あ――に、泥棒の方が、『可哀想だ。』といつて、こつちとらに何か置いて行つて吳れますよ』と張本人の俺が答へた。そこで職工長もいまは、俺の雄辯にこりて、見舞はなくなつてゐる

俺はこの人家を放れた土手から吹入る靜風を、飽く迄貪りながら、名がて同じく眠りの人となるのであつた。

ふと俺は目醒めた。昨夜は、下らない仲間の馬鹿騷ぎに交つて、隨所に自分の欠陷を見出し、事々に彼等を愛せんがために墮落して行く自分の性癖を呪つた。

いま俺は目醒めた――

夜遲く迄本など讀まないで眠る時は、朝は、何時もこんなに早く眼が醒める。仲間の催眠時間はたいてい八九時間か、遲いのになると、十時間のやうであるが、俺の催眠時間は、たいてい五時間位らしかつた。こんなことは癖になる。

眼が醒めたので素裸體で寢てゐた俺はからだにべた〳〵する薄氣味惡い布團から匍ひ出して、そこに趺坐を搔いた。俺は枕元にあつた竹の筒と『あさひ』を引寄せて、シュッとまつちを擦つた。而して社會主義者、もとの時計職工のKが、其

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の瞬間の音響につれて、閃めく光りを貪り眺めるといふ話を聽いてゐたのでそれを試したのである。それから烟りを上に向いた大きな鼻から、ふうと疲れを吐くやうに吐く。と、廻轉して、ふわり〳〵と、烟りが蚊帳の天頂を流れ初めた。俺達が破れを絲で縫つたやうな古い〳〵蚊帳なのせが、土手の雜草から反射する未明の光りがかなりそれを持つて靑ばましてゐるのだ。俺はなんべんも〳〵烟りを吸つては吐出した。いまある自分自身を見詰めるのである。而して、その小さい霧か、或は靄か或は雲かと思へる烟りの下から、異人の眼よりもヽつと蒼色を呈した、しかし、世界にたつた一つしかない靑空の、目覺めたばかりだとは思へない、生々した眼を覗くのであつた　而して、その眼の意味をいヽ加減に、自分の都合上、よいやうに見て釋つて、次におぞましく茂つた樹を見詰めた。櫻の葉は此の頃めつきり大きくなつてゐた。櫻の葉としては生命の絶頂を示してゐるのだ。俺は此の葉が夜の中に吸ふ露を羨しがつた空氣を羨らしがつた。地中にある養分も羨しくなつた。若しそんなものを吸つて、人間が自由に生きてゐられたら戀へも經濟狀態は附加しないであらう。俺は空の色と、葉の色とを較べて見たのだ。而して、これを形容したら何だらうかと、自分の見た範圍でそれに似寄つた物を探す。空は、なめらかできめがこまかいから、二十七八の背のすらりとしたクレオパトラのやうな女のからだへ靑いんきを塗つたらあんな色にならうかとも思つた。葉の方は生々しく靑黑いばかりでこれぞといふものが思當らなかつたが、どちらにしても其上に生きるに惱みが探せぬ物象とすればよかつた。しかし、生きるに惱みを持つ方が、不幸のやうでもあるが、幸福のやうにも思へた。而して俺は、それを人間が意識を持つてゐるせいだと知つた。人間が此の葉のやうに意識を持たずに暮して見たい、自然の生命を感ずる儘に生きて見たいといふ慾望は人間として生れたことを悔ひせしめた。人間は自然の儘に生活が出來ないのだ。意識あるものヽ自然と、意識無き自然とは違はずにはゐない。』

俺はもつと窓を開けて見やうと思つて、蚊帳の下から手を覗けて、二尺ばかり開らいてゐた窓を一枚開けしてしまつた。さうして、自分の席へは歸らないで、窓際わに寢てゐた酒飲みの、山本の、布團の横の方に趺坐を搔いて、窓から明け行く土手路を見てゐたが虫の鳴く聲に惹入れられたので雜草を俯した。

開け放たれた窓から、微風が味方を寄集めて來る。蚊張を搖る。ふんわり〳〵と、蚊帳が寄せたり引いたりする。さうした背景を持つた雜草の中で、ごんな偉大な獨唱家だつて敵わない虫達が鳴いてゐる。たゞ、其の音律だけは違ふが、自然の獨唱家達が、此の未明にうたひ耽つてゐるのである。虫の前には顏色の變らない人間の獨唱家が何人あらうと思はれる。虫の聲を聽いてゐると、さも虫は樂しさうである。鳥に啄ばまれたり、人手に殺されたり、冬が來て草が黃ばむに先

立つて死することはわかつてゐるが、さも樂しさうである。自分自身の、自然から背負はされた運命を知つてゐるからこそ、此の夏から秋にかけての僅かな間を樂しめる丈樂しむのだらう。虫はそんなにいつてるかのやうに樂しさうである。この小さな昆虫めらが俺に、『幸福とはどんなものか？』と說き敎へてゐるのか、こんな虫でさへ人間生活を嘲笑つてゐるぢやァなかいと思ふと、俺は自然の生命を感ずることの出來る生活に、虐げられた仲間をほつたらかして行つた方がよかないかと自分に思つた。自然に暮してゐる悉てが幸福か、自然を征服して、己れの小つほけな智慧や顔を誇る人間が幸福か、どちらが强いか？と較べて見た。しかし、死と永遠の前にはいづれも皆等しかつた。自分達が自然と呼んでゐるものすらが、不幸な運命を擔いてゐる、やがて、地球が滅び太陽が滅びるといふ人があることを考へると、ますます幸福に向つていらたゞしい慾望が湧いてくるものだ。

窓の下で、何千本となく靑い劍のやうに立並んだ、雜草の中で、いまぞとはかり自然の獨唱家達が、各自の歌をうたつてゐる！

『何處から來て、而して何處へ去るのやら？……虫たちの命も時間的でいつたら、人間の生命とは比較すべくもないであらう、しかし時間的に長い俺の方がどうして幸福といへる？……虫には家の無いし、女の無いし、食ひ物の無い。彼等は自然の同等な人民だ。』

俺は高慢ちきな理窟を捏ねたり、知つたか振りに智慧をふり廻したりして、地上の主宰者がつてゐる人間を嘲笑したくなつた。俺は、この本も讀まず、字も書かない虫達がどんな理想ある學者の雄辯よりも、どんな哲學を捏ね廻す奴よりももつと民衆的の雄辯を持つて、人間の偉大さの程度と、人間歷史の不具的發達を、論證的に、巨細に亘し喘つてゐるのを知つた。もつとも賢こい智慧を惠まれながら、もつとも愚劣に使用して能然たる人間の無能よと虫達に嘲られてゐるのぢやァないだらうかと俺は思つた。

微風のために寄せたり引いたりする蚊帳は俺の鼻面を流れる。俺は其處に眼を細くしてこつちから顔を突付けて、吹付ける蚊帳の感じから女との接吻を思ひ出した。女との接吻！　接吻丈で、それに數多く接することが出來たらなァ！俺はサニンやサニンの好きなN等を思ふのであつた。

獨唱家が雜草の中でしきりに自由な戀歌をうたひ立てゝゐる。

俺は習俗の悉てに反逆を企てゝ見たくなつた。

「家が無くともいゝ、金が無くともいゝ、友人が無くともいゝ……俺が、此の蟲達と同じやうに自然の中で暮せたらなァ!」

俺は此の時、芭蕉を思ひ、ジョゲネスを思ひ、チブシイの一群を思つた。そんな生活が出來たら俺はどんなにか幸福だらうが、時と所はそれを赦す筈がなかつた。俺はつまらない自己に歸つた。而して自己を叱つた――『それは昔の個人主義者のやることだ。あの虐げられた人々と共に、お前は此の世の中の長い間の不合理な制度と闘はねばならんぢやァないか!』

――この呟きを腹の中で覗つた俺は、暗膽たる顔、陰慘なる思ひを持つて振返つて一つ蚊帳の中に眠つてゐる兄弟達を見たのだ。

まづ其の眼に映つた者は、帳帳の向うに頭を向けて眠つてゐる其の四人組だつた。皆、相當の年をしてゐるが、皆なはんぱ者だつた。恐らく俺のやうにいろ女を持つた奴はゐない筈だ。――工場へ出ては女工達と巫山戯散らしてはいたが皆、相手にされない連中だ。慘めな人達の寢亂れ姿を見た俺の眼は、早くも涙堂が傷付けられて、暗涙の雨を降らさうとするのであつた。

涙となつて來た眼は向うの端から一人/\拾ひ初める。

其の煎餅布團は、一端によつきつと突出した、四本の足を、或は五寸、或は一尺宛見せた。汚ない頭が二つ並んでゐる。向うの角刈りはゆふべ俺に紡績女工の寫眞を見せて、或は此の女と世帶を持つかわからないといつたあの小森である。こちらの分髪は其時小森と一緒に、ぐうたらの佐山を呶鳴り付けたあの中山である。小森に就いていへば彼が上州あたりの百姓で都會熱に浮かれて東京に來て、方々の工場を渡り歩いてゐる男だといふに止まるが、中山の身の上に就ては、俺は可なりよく知つてゐる。彼が兵隊に行つてごんなに苛められたか、彼が其の株式商店に居つた時は、どんな風に藝者や女郎を買つたか? しかし俺はそれを省く。仲間は此の二人を蔭で惡口をいふ時には、野郎夫婦と呼んでゐる。全く、それは一つ布團に寢てゐて、お互ひに頰ッぺたに接吻せんばかりに仲が好いから。其の四本の足は水死人みたいに汚なかつたさうして足の其の持主である二人が夜通し襲はれた蚤と南京蟲の力の程を思はせてゐた。

其の次に眼に映つたのは布團の山である。こゝには蟋蟀みたいな顏をした浪花節が寢てゐるのである。彼には『南』といふ立派な姓があるのであるが、皆はそれが相應しないので浪花節ご呼んでゐた。といふのは一時彼は浪花節語りの弟子だつたからである。工場でもさうだつたが小舍に歸つてからも又さうで、彼は昔を時々思ひ出しては、見臺の代りに自分の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

長細い股を使用して安つぽい扇子を振り上げて叩いた。見知らぬ聽手等は呆れて彼のからだと見合はす程、大きな聲を張上げて忠臣や烈婦の傳を吠へた。しかし彼自身はといふに、仕事が横着で町に年老いた父兄がゐるのだがそこに寄付かない程不孝者である。土手を通る俗人達が、びつくりして眼を聳てる者だから藝術家はいゝ氣になつて、埋もれた「南」の意氣を示すのであつた。其疲れが、工場から背負つて來る疲れと一緒になつて、性來あまり丈夫でない「南」を、こんなに惡い行儀で寢かし付けるのである。夜明け前になると、まるで土龍のやうに布團の中にもぐり込んでゐるやつだ。

其の隣りの男は一つ小舍にゐても、誰もあまり名を呼掛けないらしい無口の男で、皆から、姓名の代りに、『おい〱。』と呼ばれてゐる。これが又姓名よりは彼の姿に相應しかつた。『おい〱。』は片足を布團から投出して、浪花節の方へ載つけてゐる。まるで浪花節が自分をほつたらかして逃げて行くのを怖れてゐるやうに……股間から汚れた褌が見える。

そこを見調べたので、俺はより一層極度に、自分の臀の向いてゐる方――自分等の組――他の四人組と足と足を突付けて寢る――向つて、振返つた。

向うの端――俺の寢床の左隣りが狐のやうな顏をした池田である。頰骨の飛出た眞蒼な、營養不足らしい狐面に、仲間は青狐といふ名をつけたが、此の頃は、此の青狐は、暑さと毒虫とに苛められてお臀ばかり出して寢るゆへ、野郎夫婦がけつねといふ尊稱を奉つてゐる。女の惚氣なんかいつたことがないが、かなり性慾の衝動に耐ゑ兼ねると見えて、夜は、變なうわ言をいつたり、布團から　　を出して、此男は、　　　て、　　抱擁した　　夢丁を思つてゐる樣子が又となく憫れだつた。

再び俺は其の一點を凝視して、眼を地球位ゐ大きくした。性慾のほかなんの樂しみもない彼等としては尤ものことである、と俺は思つた。

其の一點は規則正しい秒間を持つて　　ゐる。　　苦しでんゐた。

『やつ女のことを考へたら耐らねえんだから、又惡いことでもしなければいゝが……？』

俺はおせんと逢引をする――最早それは斷然と止めやうと決心してゐるのであるが――曠野の夕方を思ひ起した。そこでは近所の三つ四つばかりの女の子や男の子たちが、足元の暗くなるのも忘れて遊んでゐることがあつた。さうして彼は時々そこを通つた。そこで俺は心に呟いた。『よく新聞でも報導されてるんだ、池田がそんな罪惡を犯さない男だとは誰だつて保證出來ない事だ。若し曠野へ誘惑されてそんなことでもせうものなら、當然背負ふにしてはあまりに慘虐な、不當

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

な、怖るべき罪名や懲戒を背負はねばならんぞ。』と。

俺の寢床の右隣りは佐山で、口を開けて寢てゐる。顔一面に生毛が生へて、毛穴が、煤と垢で埋つてゐるのがこちらからはつきりわかる。まくわ瓜みたいな其の顔の上で、工場のありとあらゆる不公平な仕打ちのために、虐げられ疲れた彼の魂ひが眠つてゐる。

其左隣り――自分の眼の下には酒飲みの山本が眠つてゐる。彼は鐵砲蟲といふ綽名を、皆から附けられてゐる。醉拂つて些し御機嫌がよいと彼は誰彼の別なく。

『こつちとらァまるで鐵砲蟲のやうだなァ……まるで食つて通るだけだね。』

七人の鼾きは何かを呪ふやうに立つては、何處へか消えて行く。

雜草では自然に合唱が聽へる。不調和の中にある一つの調和のある聲だ。

俺は又眼を雜草に呉れて、ぢいつとして、自分と仲間のことを考へた。

『親はこんな奴隷小作で暮せよ、と生み落したわけでもあるまいに、何故こんな生活をしなければならないのだ？ 彼等の性質が惡いせいか、それとも世の中の罪か？ ……俺は思ふに、そのごさらもだ。俺は中學二年の時から、他所の國へ流れ來て、祖父樣や、母樣を養はねばならなかつたゝめ、誰も知人がなかつたゝめ、こんな身の上になつてしまつたものゝ彼等は皆初めは割のいゝ仕事にありついてゐた者だ。……しかし彼等は其の仕事に辛抱することが出來ないのだ。』

俺は眠つてゐる人達のいち〳〵の性格をほぢり出した。彼等はどこへ行つても辛抱出來なかつた。どこへ行つても自分を愛する者を見付けることが出來なかつた。これは彼等が、そんな性質に生れてゐるせいである。暫らく俺は癒し難い個々の性僻を考へてゐた。

『最早如何ともすることが出來ない。そんな歪んだ性質を持つた者が子を生み、其子が又子を生む時、人は個性の缺陷から全愈することは出來ない。しかし、彼等の個性に適合するやうな世の中とすることは出來ないことでもないぜ。何故なら彼等にはどんな性僻があらうとも彼等は彼等の手足を動かして食つてゐる人達である。俺は多くの義人を思つた。彼等は人類の不幸を見るに忍びずして、或は　　を覺悟して働いてゐるのである。彼等は叫び、實行する。實に人道的感激に奮ひ起つた人々だ！　俺は早く　　あたまへ血をのぼさうとしたが又靜かな考察の底に漬つた。

『しかし。』と俺は思つた。『血で拵へた世の中をあいつらはどれ程いゝものにすることが出來る？。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

俺はさう自分に問ふて、自分が答へた。

『でもあいつらだつて暮しが樂になれば、あいつらを尊敬してやりさへすれば從つてあいつらも自分の性質を耻ぢ人間らしくなることであらう――。』

『ぢやァそのやうな時代になるのはいつごろだ。世の中が組直されたからつて、すぐ人間の質は改造されるわけがない。だからして先づ質を改造しさへすれば自然と世の中は建直されるのだ――。』

『しかし、この組立てゞ質を改良せうといふのは錆びた水で紙を製造せうといふ程無智なことぢやないか　で飯を食つてゐる人。或は資本主義の組織があるばかりに飯を食つて行ける人達がデモクラシーを行ふことが出來るだらうか？小、中、大學の教育はどうか、すべての書籍、すべての新聞雜誌はどうか……皆　が經營するか、資本家が經營してゐるものぢやァねいか――。』

俺はもう疲れてしまつた。人生は苦惱の係蹄であるといつた『チエホフの六號室。』のお醫者さんの言葉は思ひ出された。『人間は本當の生活をせうと思つてお互ひに傷付けたり、殺し合つたりしてゐるのだ。人間みんなが傷け合はないで、殺し合はないで悟りをひらいて生活するといふ時代は何時人間の上に來るのだらう……何といふ小つぼけな馬鹿な動物だらう、動物よりも馬鹿で不幸だ――。』

俺は他人のことはもう闘ひたくないやうな氣がした。『自分は人間の一人として正しく生き、そつとして置いて貰ひたいぢき、土の中に這入らねばならないのだから……。』

俺はふと自然が思ひ出された。曠野に行つて初業の汽笛がなる迄朝と話して來やうと思つて、蚊帳の外に出た。浴衣を着た。寢床は佐山が上げて呉れるに違ひない。皆の眠りを覺すことを惧れながら、土間に降りて、そつと一本の杖を持つて坂をてく〳〵土手に登つて、一人の人影も無い夜明けの土手を獨りで俺は歩いて行く。(長篇の一節)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

田園雜記

神近市子

稻の秋。空が高く澄んで、百舌が林の間で頻りに鳴く。離れの椽先で赤ん坊と二人日光浴をやつてゐると、九つになるお秋さんが熟した無花果を七つ八つ兩手につかんで走つて來る。前畠の畔に二本、家の背後に一本あるのを、一つ〳〵丹念に探し歩いたのだ。

『姉さん、無花果出すべ。』

『有がたう。好いのが出來てゐましたか。』

日本種は皮は少し堅くても中味が美しく色づいて味があるが、外國種は皮が割れてゐても下半分は堅くて味がない。

『姉さん、うめえかね。』

『え〵、今日のは少しよく熟してゐるけど、それでも東京で喰べる無花果の方がおいしいわ。』

『姉さん。』

『何ですね？』

『東京は、はあ何でもうめえだね。昨日はあ菓子買つて來て出したゞが、お前拙かつたつぺ。』

お秋さんは、こゝで少しの間考へる。

『姉さん、はあもうぢつきに雲州(蜜柑の種類)が赤らむだ。雲州ができると、好いのはお父さんが皆東京さ賣るだは。そしておら達は小ちやつこいのや酸ばいのや腐つたのばー貰ふだ。お父さんは鰻も賣るだ。東京者はごうして皆うめえものばがり喰べるだは？そしておら達ばかりくづを喰べるだは？』

『いゝえ、東京者が皆で喰べるのではないのですよ。只ね、東京にはあんな鰻でも菓子でも蜜柑でも、甘味しいものなら澤山お金を出して買ふブルジョアが大勢ゐるのですよ。』

『ブルジョアだ？ それは何だは？ 寒いやうな名だして。それは何だは？』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『ブルジョアつて云ふのは化物ですよ。甘味しいものや美しいものは他人にはあまさずに皆喰つて了ふ化物ですよ。社會主義者と云ふ人達が、その化物を倒して了つて、誰も彼も饅や蜜柑が喰べられるやうになるつて大騒ぎをしてゐるのですよ。』

『その化物はよつぽど大きかつぺな。あーんでも喰つて了ふてば。』

○

お秋さんは小さな反逆者だ。

夏の間、暑いうちは腰巻一枚の裸體の身體に赤ん坊を負つて近所を遊び歩いたものだ。ウロ〳〵してゐる尾行の巡査に出逢ふことがあると、巡査の方で困るのだつた。

『むつこさん、（お孃さんの意味）着物を着て負つておいでなさい。』などゝお手のものゝ取締り法を持ち出すと、

『だッが着るもんけえ。』と一蹴されて了つたものだ。

『兄さんのところのお客さんは今日も泊ぃますかい。』とやると

『あんでおらが知るもんかい。おめえ家さ來て兄さに訊ねたらよかつぺ』だ。

おそろしく直線的な物の云ひやうをする子供である。

○

私共が村に來てから、村では社會主義者に關する是非の議論が盛んに行はれてゐる模樣である。この村の人々の間に少しの困難もなく入つて行つて、極めて手短く率直な言葉で社會主義が正義と人類愛とに根ざしたものだと云ふことを私共に代つて宣傳して歩くものは子供達だ。

『社會主義は、貧乏者をよくしてやるだ。』

『泥棒は巡査におつさるゝだが、（叱られる又は批難される程の意味）社會主義者には巡査の方がおつさるゝでん。』

『社會主義者は、○○○○もおつする。』

これ位の範圍の社會學上の知識をもつて、近所の大人や子供達と論戰を努めてゐる。そして大抵は勝つてゐる。

『兄さんがさう云つたどに。』

『姉さんが敎へてくれたどよ。』これが子供達の主張を裏づけてゐる最後のもので又凡てのものだ。これが子供達が窮すると

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と擔ぎ出す一枚張りである。田舎ではおそろしく物事が簡單に濟む。

○

私共に尾行がついた時、大痛事であつたのは西隣りの源兵衛どんであつた。

大變に氣持の好い月夜の晩であつた。涼しい夏の夜風に醉つた顔を吹かれ乍ら、千鳥足で青い稻田の畔を自分の家の方に歩いてゐると、源兵衛どんは晝間から近所をウロ〳〵してゐる妙な人間達のことを思ひ出して癪に障つて仕方なかつたものだ。

「巡査の奴等、はあこの間から荒し廻つてゐる泥棒は未だに捕へもしねえで、社會主義者を追けて歩いたり碌なことはしねえだ。餘計なことははあ止めて、泥棒でも捕へて來い！　この馬鹿野郎！」大きな聲でかう怒鳴り乍ら、好い心持で自分の家の生垣に添ふて家に入らうとした。スルと綺麗に刈り込んだその槙の生垣の蔭から、ヒヨイと『妙な人間達』が出來たのだ。彼等は人に見られぬやうに犬のやうに源兵衛どんの生垣の根に蹲つて、私共の住居を監視してゐたところであつた。

「お前、今云つた言をもう一遍云つて見ろ！」

「失敬なことを云つたら、聞き流しにはしないぞ。」

あらゆる脅威を聞かされて、源兵衛どんは痛み入つたことである。五合の酒の醉もさめて了つて、平詫りにあやまつたものだ。

○

「あつたら五合の酒を水にしたわ。監獄を造へて威張つてゐる奴等には、おらはあ迚も叶はねだ。」

翌朝、源兵衛どんの述懷である。可笑がつて笑える者があつたら、その者は咀はれろ！

「こんなに毎日霖雨がつゞいて、その後で大水がでると上の方から押し流されて下る鰻がこゝらには無數に來る、小川に張つてある網に一貫目も二貫目もかゝることは珍しくない。一疋で百目位かゝるのがある。

然し、どんなに目方がかゝる鰻でも、白い筈の腹部が黒いと摘み出されて目方には加へられない。これはまだ一度も海に行つて來たことがないので、味が劣つて拙いからである。白い、闇にも見誤られないほどに白い腹を持つた鰻はご上物である。

少し變な比喩であるが、（どうせ土臭い田園の感想だ。肥料の臭ひだの川魚の臭ひだの少しはしても許して貰はなくてはならぬ。）ロシアで革命が成功した當時は、前科者でなくては幅が利かなかつたさうだ、勿論、この場合の前科者と云ふのは國事犯の前科者を指してゐたのであらうが、然し考へやうによつては一般の前科者であつたかも知れないやうに私には思はれて來る。ロスの記述を見ると、革命委員達は凡ての牢獄の門を開くと、その一人々々に犯罪の性質を糺し、國事犯であると敬意をもつて革命の成功をつげ、一般の犯罪者には將來を戒めて放免したと云ふことであつた。『死をもつて脅かして置いた。』と云つてあるけれど、革命の成功で革命家達は極端の感激と無上の幸福感とで善良そのものになつてゐた場合である。あの場合の威脅は決して單なる威脅でなく、その個人の運命を豫示した好意上のものであつたに相違ない。

そして更に私の考では、革命當時の混沌とした社會狀態では、一般の前科者も幅を利かしたに相違ない。が、それは何も過去の犯罪が手柄であつたからではなく、犯罪によつて與へられた牢獄の苦痛と孤獨との生活が、その個人の意志を練り物に怖れぬ精神を與へ、その活動を鋭くした爲めである。

鰻が初めて海に入つて海水を呑んだ時の苦惱は、人間には一寸想像ができない。腹を白くするほどの刺戟だ。定めて五臟六腑がきれ〴〵になつてくづるゝかとも感じられるのだらう。

人間も、牢獄の中で長く暮して飢餓と孤獨との中でのむ涙の味は苦しいものである。然し、その涙の中で見てゐる人生は、一番眞實のものである。『人類の未來の成長を妊んでゐるものは、苦痛と孤獨との間に流さるゝ涙である。』この頃になつて、私はこの誰れかの言葉を染々思ひ出すことがある。

○

月の半分は、九十九里の岸邊を洗つてゐる太平洋の怒濤の音が、東の方から村迄聞えて來る。

『ゴオー　ゴオー　ゴオー』陰氣な、不吉な暗い音だ。

海の、あの莫大な面積の存在に少しのスキも見せないで支配してゐる自然力を想像してゐると、私は人生のことも一應何もかもこれで好いのではないかと疑つて見ることがある。

然し、單調な陰氣な海の聲も、九十九里の海岸に出て聞くと複雜な種々の音を含んでゐる。穩かな凪いだ海にも、不可思議不可計不可量數の大波小波の無限の飛躍、跳梁、衝動など、千萬種の姿がある。つまりさうした凡ゆる騷擾と凡ゆる活動を含んで穩かに、少しのスキもないのが海だ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人生の事も別ではない。反逆、騒擾、流血、これらの凡てのものを含んで無限から無限を流るゝのが人生だ。自然の博大な愛を體驗して無抵抗主義を實行することは一應大變に立派なことのやうに考へられる。然し、人間が造られたものゝ一つである以上は、人間としてこの不平反抗に生きる方が、私にはより以上に人間らしい事に考へられる。矢張り、疑ひ乍ら信じ、爭ひ乍ら平和を求め、殺し乍ら愍むのが、人間の負はされた運命らしい。矛盾であり乍ら少しも矛盾でないことが人生には澤山にある。（十月十日）

月

藤森成吉

今朝起きると、いつももう來てゐる筈の新聞がまだ一つも來てゐないと家の者が云ふ、不思議な事だね、又新聞社のストライキでもあつたのかしら、と云ひながら、それでもと思つて門傍の郵便箱まで行つて開けて見たが、やつぱりそこにも入つてゐない、その歸りみちに、私はフト一枚の白い濕つた紙片が土の上へ落ちてゐるのに氣づいた、廣告のビラでも投げ込んで行つたのかと思つて、紙屑籠へでも持つてゆくつもりで拾つて見ると、案外にもそれは新聞の號外だつた、然かもその上には、今晩七時半に原首相が東京驛で刺された、と記されてあつた。

あまりに突然な文字によつて私はかなり強く驚かされた、それは記事にもあるとほり、たしかに昨夜配達が投げ込んで行つてくれたものに相違なかつた、客を送り出して十時前にみんな寢て了つた私の家では、今朝まで誰もそれを知らずにゐたのだ。

短刀で刺し、然かもその犯人は逃れ去つた、と云ふ簡單な文句をよみ返して、私はつゞいてその短い時間のあいだの刺客の行動を頭に描いた、何と云ふ機敏さだらう、と思つた、場所なり場合なり、人間はその時ごの位首相の傍にゐたか知れまい、然かももしこれが記事どほりだとすれば、これは飛ぶ鳥の如しと云ふ迅さの形容も當らない、……さう思つたのだ。

が、丁度朝飯を濟ませた時、新聞が續々と投げ込まれて來た、それを開いて、私は二度目のおどろきを禁じられなかつ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た、號外とは相違して、犯人は即座に捕へられてゐた、が、それはまだわづか十九歳の青年だつた、然かも首相はたゞ一突きのもとに死んでゐた、あの精力絶倫と萬人から驚嘆されてゐた首相が。

私は一遍全體の記事へ眼をとほして了つてから、再び昨夜の自分のことを考へた。

昨日は私は用事があつて、夕方まで一日外にゐて、うちへ歸つて來たのは丁度六時半時分だつた、此の頃かなり長い間つゞいて私の頭を惱ましてゐる死生の問題を、その歸り途に私はやつぱり考へながら歩いてゐた、少し前に較べれば、此の頃の私は、その問題についてひどく明るく又自由になつた、丁度空はすつかりくれて、晴れた蒼黒色の中に細い金の輪のやうな三日月が輝いてゐた。

それはほんとうの意味の三日月だつた、前の晩にも私はうなだれて歩いてゐたが、フト頭をあげると、何とも云へない細い月が高く眼に入つた、それを眺めて、私は一體何と云ふ纖細さだらうと思つた、その時の私は、ほそい金屬の片鱗なぞと云ふよりも、むしろクル／＼とちゞれた光つた羊毛の一片と云つたやうな感じをその天體から受けた、が、今夜の月はもつと肉がついて、如何にも三日月と云つた氣分に一杯あふれてゐた、それは丁度冷徹な薄刃のやうに私の頭に沁みた、私は何とも云へず爽かな、うれしい氣もちがした。

「あゝ、いゝな―」。

私は實際ひとりで呟いた。

それから歸つて夕飯を食つてゐると、そこへ晝留守中にたづねて來てくれた或る雜誌の編輯者が、再び訪れて來た、で、二階へとほしておいて、間もなく私もあがつて行つた、飲み藥の都合でそのとき時計を見たら、丁度七時だつた、その、私なぞよりはずつと年配？　明治大正の詩壇で古くから或る位地を占めてゐる詩人兼編輯者と、私は久しぶりの挨拶を濟ませてから用談を話した、勿論創作の方の依頼だつたが、私は現在の自分の氣もちを話して、茲暫く一切の原稿をことはるつもりでゐるからと云ふことを云つた、それに聯關して、又死生の話が出た、私はその人が、その年齢なり境遇なりで、果してどんな死生の考へを持つてゐるかを知りたくなつた、さうして不遠慮に訊いた。

「全くその問題を考へ始めれば、藝術なんぞとても當分手につきませんね」。

さう云ひながら、その人はやつぱり靈魂の可能性を信じてゐると、私に打ち明けてくれた。

「さうですか」。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さう呟きながら、私はやつぱり室一つそとに輝いてゐる月の光を頭に思ひ浮べてゐた、その人の歸つて行つたのは八時前だつた、考へて見ると、丁度私達がそんな生死の問題を話してゐた時刻に、原氏は停車場で暗殺されてゐたのだつた。

單に首相の死と云ふことは、私に取つて問題でない、宰相の死も乞食の死も、藝術家の心に取つてはたゞ一個の人間の死に外ならない、然かもあれほど脆く實際に死んで行つた首相の最後を考へると、私は餘計それが一個の凡人の死であることを感ぜずにはゐられなくなる。

中間と云ふ青年の情熱は、私の今考へてゐる冷靜な死の問題とは暫くかけ離れたものだ、私にもそんな情熱はある、が、さう云ふ一切の情熱を、私はしばらく自分の問題と混同させたくなく思つてゐる、自分の少しも知らない此のかよはい青年に對して、私は涙ぐましいやうな氣もちがしながら、やつぱり昨夜の、又一昨日の晩の冴えた明かな月を見る。

一一、五、

批評

深田康算氏の藝術観論

深田康算氏がプラトーンについて、アリストテレースについて、「哲學研究」に於てしば／＼その研究を發表されたのを知つてゐる。今や氏はそれを評論の形にまとめて「思想」に於て「解放」に於て「表現」に於て發表された。それは余等藝術論をなすものにとつて一つの暗示を與へるに足りる。その暗示とは何であるか。

美學が一個の科學として成立するか否かは長い間の疑問である。バウムガルテンに於てそれはたゞ彼の哲學體系の完成にのみ役立つてゐると共に、それは全然形而上學であつた。形而上學はいかなる對象を以てしても成される。即ち美の形而上學はつひに現實の何物をもすてゝ、「說」としての完成に終る。かくして獨逸浪漫派哲學例へばシエリングの如きに於てその最高潮に達すると共に、その「美」の實體であり本體であるところのものが何等それに關せざるが如き奇観を呈するに至つたのである。科學の成立はそれの對象と方法とによつて定まる。フエヒネル、ウエバーの一派がつひに近代美學を心理學の基礎に建てんとし、リップスがそれをその心理學の一部となすに及んで、美學は學として滅亡した。自然科學の世界觀は因果關係によつて說明される。さうして自然現象としての心理現象もそれより一歩も出ることが出來ない。科學としての心理學はそれが哲學から獨立するに苦んでゐた。しかも美學はその獨立を維持すべくなほ哲學の力をかりやうとしてゐる。さうしてそれの對象を「美」に求むべきか、「藝術」に求むべきかになやんでゐる。學としての美學は、對象として「美」を求めれば形而上學に走らざるを得ず、「藝術」を求めれば、その適從するところを知らないのである。

美といふ「理想」乃至「本體」があるか否かを斷ずるのは、現代意識を呼吸するものにとつてすでに問題でない。それは古代のイデアの痕迹であり、死體である。もしも理想としての美が存し、それ以外のものは美でないとするならば現代意識の大部分は破壊されるべきである。それは一つの機械論であり、決して理想主義でない。現實主義が原始的であつて、理想主義が中世的であるならば、現代は寧ろ原始に歸らうとする傾向をもつ。さうして必然的に來るものは「理想美」の否定であり、「本體」の否定である。「理想美」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を求めることは却つて浪漫派に歸るべきである。

「藝術」を對象とする美學は、かつて藝術に一つの軌範を與へやうとしてゐた。その極致として古典主義がある。しかもいかに一つのノルムが新しき存在を否定しやうとも、すでに對象を藝術にとつた以上、ノルムに反する藝術の發生を無視することは出來ない。軌範科學としての美學の立場はそこに失はれることになる。藝術は常に進化しつゝある、之に反してノルムはます〳〵硬化せんとしつゝある、そこに矛盾がある。

深田氏は近代藝術觀の頂點にニイチエを求め、さうして近代藝術觀の問題を「天才」と「創造」と「美」となした。この認識の材料となつたものは、ワイルドであり、ペイタでありショーペンハウエルである。しかも余等が認めるところによれば「天才」は少くともショーペンハウエル說の天才は―すでに世を去つた。ワイルドの「美」とはつひにボドレルの美に若かない。殘るものは「創造」である。しかも余等が意味するときに於て、それらの命題は、概念としての命題でなく、事實としての存在に外ならない。こゝに氏と余等との相違がある。同時に氏が、プラトーン、アリストテレースの模倣を以て、近代藝術觀の修正に役立たしめやうとしたところに全く立場が分れるのが知れる。

人は知るかも知れない。進化論に於て、人がダーウイン派たると、ラマルク派たるとに於て、その立場に至大の相違がある。さうして論爭に日を重ねてつきないと共に、生物進化の事實は何等の相違を見ない。それは事實として存するからである。今「藝術」にあらずして「藝術觀」のみを以て材料となし、以て新たなる藝術觀をなしたならば、それはいかなる意義をもつのであるか。それは「進化學史」として價値があると共に、「進化」の事實には何の關係もないものである、同樣にしてそれは「藝術論史」としてのみ存在の意義があり、「藝術」そのものにとつては沒交涉でなければならない。今日人はアインスタインをいふであらう。よし。ニウトンとアインスタインと、選ぶところは人に任ぜよ。事實は同じであらう。故に深田氏が近代藝術「觀」の何たるかを求むるも勝手である。しかもそれから抽象し來つた概念を以て、近代「藝術」のそれであるとなし、しかもそれを叱正する必要があるとなすのは、本末を誤つてゐる。ノルムヴイセンシヤフトは科學でない。

余等によれば、美學は藝術を對象すべきであつて、美を對象とすべきでない。美といふ概念は不變であると共に、美は刻々に變ずる。存在が唯一絕對なるとき、そこに價値はない。故に美もない。美は藝術であり、藝術は具體的な作品によるべきである。然らば美學とは結局藝術批評としてのみしか存在し得られない。藝術法則が、藝術から得られるにしても、一たび新たなる藝術品が出たとき、その法則は直ちに破られなければならない。社會學に於て、ジムメル、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

デュルケムが思惟するが如く、美學もその軌範をすてなければならない。深田氏は「藝術」に即せずして「觀」にたよつてゐる。故に氏によれば「眞と善とから獨立せる美」が考へられないと同時に「學術と道德とに關係を有せざる藝術」は考へられないのである。(この點につき、前號の西田氏の「眞善美の合一點」に對する評を參照せよ）さうして藝術模倣説を兎に角承認される氏は、アリストテレースの pathe と ethe の模倣によつて、つひに藝術の對象を「情趣的象徵的意味」とされる。そこに現代藝術の過去を追ふこころの美學者の面目が明にされてゐるのである。(正俊)

長篇『幻滅の彼方へ』 春秋社 加藤一夫著

加藤氏の作品を讀んで感ずる快さは、所謂文壇人の既に失ひ盡した、みづ〳〵しさが作全體に溢れてゐることである。世間の苦勞を知らない、生一本な、元氣のいゝ大學生が、世の中を批評してゐるやうな、太い線で縱横に描かれた快さがある。吾々は所謂苦勞人のしかつめらしい世間評なんか聞かうとは思はない。それよりか何等の束縛的傳統によつて頭を固められてゐない、自由な眼を持つた人達の語る言葉を聞きたい。さう云ふ意味で加藤氏の作品に自分は親しみを持つ。然しながら、その作品を傑ぐれたものであるとは、如何にしても自分は云へない。たゞ加藤氏の作品が所謂文壇の作品とは違つて、如何にも素人くさく、生一本で、遠慮もなく自分の書きたい儘を書いてゐるのが、讀んでゐても快いと云ふのである。然しその爲めに、露骨な概念が、まるで石塊のやうに、彼方にも此方にも飛び出してゐて、尙ほその上に所々、下手な匠氣が顏を出してゐて、或時は通俗小説を讀ませられてゐるやうな氣さへすることがある。

長篇『幻滅の彼方へ』は決していゝ作ではない。これは自分だけが感じたのかも知れないが、作の前半にはトルストイの影が投げられてゐるし、後半へ來るとアルチバセフが顏をそつと出してゐる。加藤氏が序文に書いた文章の一部分を玆に引用すると『これは余の最も根底的なる偶像破壞である。余は凡ゆる既成宗教や思想や生活を破壞した。そして余自身を何者によつても（余自身の思想にすらも）縛られざらんがために何者をも建設しなかつた。破壞と自發的なる衝動的創造、これば余の新しき宗教であり、新しき運動である。余に於ては、社會運動は余の宗教である。余の宗敎は社會運動である。そして生活と藝術とはその表現である。』と言つてゐる。自分は加藤氏のこの宣言に贊成する。然し氏の偶像破壞運動が、社會運動が、この『幻滅の彼方へ』に表現されてゐるやうなものであるならば、自分は些か苦笑せざるを得ない。殊に後半の女主人公のおしまや野

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

田が印刷工場へ入る所の描寫や、それの背景をなす思想などは餘りに淺薄な概念で、通俗小說と同樣の甘さである。あの甘さが、また空想が、加藤氏の生活の表現であるとするなら、前に引用した序文の一節に無條件で贊成する自分でも、これでは一寸考へなほさなければならぬ。それに加藤氏は餘り自分勝手に作中の人物を動かしてゐる。人生に起つた事件を、またその中に活動した人間を、作者の主觀で自由にしやうと思ふならば、作者にそれだけの深刻な主觀の燃燒が欲しい。人間を勝手に作者の手で壓潰して歪んだ形にして見せるならば、さう歪ませずには居られなかつた作者の苦悶が裏附けられてこそ、始めてその不自然な姿が、自然な姿よりもより以上の力で讀者の胸に迫つて來る。

『幻滅の彼方へ』には果してこの力があるであらうか——自分は茲に率直に言ふが『幻滅の彼方へ』は賀川豐彥氏の『死線を越えて』と殆んど同じやうなレベルに立つものである。たゞ賀川氏には最早や未來がないが、加藤氏には未來があると自分は思ふ。賀川氏は最後の一線に立つ者であり、加藤氏は最初の一線に立つ者である。

この前に自分は『響かぬ鐘』のなかの數篇を讀んだ時に感じたことであるが、あの中の『田園生活者の告白』には親しみを持つて讀むことが出來た。そればかりでなく、あるフレッシュな感じをさへ受けた。ところが『一宣傳者の手記』に至つては、自分のやうに加藤氏と共通の思想の所有者であつてすらも、途中で讀むことを止して終つた。作が拙いよりも何よりも、餘りに安價に一切のことが取扱はれてゐるからである。これでは加藤氏が實行してゐる社會運動は、一場の茶番としか恐らくは讀者の胸に映じないであらう。加藤氏の作中で、宗教的生活を取扱つたものは相當な出來榮えであるにも拘らず、社會主義的作品は悉く拙劣で概念か露骨で、通俗小說の域に墮してゐる。『幻滅の彼方へ』でも同樣である。

安價な淚が無價値であると同じく、安價な亢奮も無意義である。民衆を動かす眞實の力はそんなものからは、決して湧き上つては來ない。加藤氏の社會主義的作品は藝術としても失敗であり、宣傳としても無効である。早く『幻滅の彼方へ』踊り込んで、ふわ／＼した力でなく、どつしりとした底力を摑んで欲しい。その時こそ加藤氏が劃時代的作品を民衆の前に投げる時であり、同時に氏の社會主義的作品が、現在のブルジョア文壇を征服する時である。

加藤氏が何時までも『幻滅の彼方へ』を書いてゐる限り、また氏の社會運動が『幻滅の彼方へ』に書かれてゐる通りの甘さである限り、氏の前途は行詰りである。何者にも縛られてない筈の氏の作品はある種の概念で縛り上げられたものではなからうか。自分はもつと加藤氏が、生活と人間とを忠實に觀察し諒解されることが希ましい。そして血管の中に蒼醒めた冷たい血の流れてゐる人形を描くことのかは

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

りに、眞紅な沸々と煮えたぎるやうな血を持つた、眞實の人間を生けるが樣に紙の上に動かして欲しい。それには、何よりも先づ、氏自身の概念を棄てなければならぬ。お說敎をしやうとする態度を棄てなければならぬ。そしてあるが儘に、この人生と人間とを紙上に再現しなければならぬ。

民衆を動かす力は理論でなくして、事實である。眞摯なクリスチャンからトルストイアンに、トルストイアンから最近更らにアナキストに轉じた加藤一夫氏は、今度は何に轉ずるであらうか。自分は氏が轉々として窮局なく轉がつて行く性格の所有者らしく推察される所に、無限の味ひを見出してゐる。希はくは永久に現在そのものに對する叛逆者であつて欲しい。その生活に於て、藝術に於て本然のまゝの加藤一夫その人であつて欲しい。然しその見本として、吾々に見せられたにしては、『幻滅の彼方へ』は餘りに、自分の期待を裏切るものである。（逸平）

小說『その日暮しをする人』

――佐藤春夫氏、中央公論――

何か一冊に纒つたものをと思つて、何かと心掛けたが、別段書き度いこともない。來月は何か書くとして、今月も矢張り雜誌からのものにしやう。

葛西善藏氏の「雨」を讀んだが、氏をよく知つてゐるだけに、傷々しさが身に泌みて感じられたが、酒に對しての疑問は何うしても消すことが出來なかつた。谷崎潤一郎氏の「調書の一節」は勿論感心しない。一體、僕は南文部次官なごのやうに本も讀んでゐないし、頭もよくないから、谷崎、菊池、芥川の諸氏のやうなものを讃美するまでに、頭腦が進化してゐないかも知れないが、その進化してゐない頭から見ても、これは隨分と厭なものであるやうだ。矢張り活動寫眞でもやつてゐる方が好からう。

かう、何も彼も感心出來ないで、先月も先々月も惡口ばかりで、何かしらいゝものをと思ふが、なか〳〵無いので閉口である。先月のこさだ、令子洋文の方へ行つたら、いきなり佐藤春夫の「その日暮しをする人」を讀んだかと言ひ出した。僕は直ぐ應と答へた。君は隨分嫌いだと思つたらうといふ。僕はその前日それを讀んでゐた。で、僕は隨分厭だとも思つたが、いいものだご思つた。その心境には不滿ばかりだが、何かなし打たれる處がある。と答へた。洋文は僕もさうだと言ふ。君は厭がると思つたら、さうかねといふ。

最近讀んだものゝ中では、細田民樹氏の「同胞」、三島章道氏の「寺田屋騷動と三人兄弟」、藤森成吉氏の「避暑客」なごを、それ〳〵違つた意味でいゝものだと思つた。それに就ては、此處しは言はぬ。が、「その日暮しをする人」は、これ等とまるで違つた或る感銘を、僕に與へてくれた。今

迄佐藤氏のものは餘りに讀んでゐないし、讀んだものゝ中からも餘りいゝ感じは受けてゐない。世間の噂などでは、寧ろ厭な話をさへ聞いてゐる。これにしても、作の筋など隨分と出鱈目であり、人妻を戀してゐたり、毎日ぶら〳〵してはネクタイばかりを買ひ集めてゐる。生活としては隨分厭なものだ。何だと思ふ。反感さへ持つ。だが、出鱈目な筋が、ちやんと佐藤氏の生活の氣持と合つて、寸分の噓もなく、誇張もない。そして、其處にはその底にひそむ爆發性があるのだ。こんな點は芥川、菊池などいふ人々には迚も見られぬもので、作家として尤も尊いところではないかとさへ思はれる。佐藤氏の生活は、我々の尤も嫌ふ、尤も排斥する生活である。爲すなく、ぶら〳〵と、まるで睾丸を抱へて歩いてゐるやうな生活は、投げつけてやり度いやうだ。だが、氏はそれを全然肯定してゐるのではなく、爆發させやうとしてゐる氣持は充分持つてゐる。學者などが、自己嫌惡、社會嫌惡の狀態から或種の文學が生れる、だから或る時期に於て、才分ある人々がそんな狀態の中にあることは自然であり、いゝことでもあると言つたのは、一理あることゝ言はねばならない。

僕が感心したのは主にその點であつて、佐藤氏がこれから何う爆發するかは、尤も興味ある問題である。佐藤氏の趣味、其處では好みといはれてゐるが、それは僕等に言はすれば、尤も厭なものである。あれ位までにネクタイなどに凝る位なら、もつと外のもので凝つて貰ひ度いと言ひ度い位のものだ。だが、それもたまらない生活から來てゐるものだと見れば、諒解が出來るのである。

さて、此處で氏に註文せねばならぬことは、如實に爆發して終つて欲しいことだ。今の社會主義者などは、その意味から言へば、もつと早く爆發してゐる。爆發してから沈靜して終つたのもあるが、爆發だけはもうとつくにして終つてゐる。で、佐藤氏の場合が、どんな形で現はれて來るか知らんが、兎に角、もつとすつきりしたものになつて欲しいと思ふ。數年前に見た、「李太白」は成程面白いものではあつた。が、あの小說から僕等は何を學ばねばならないだらう。僕等は僕等の現在の生活から、もつと直接な、もつと血も肉もある感銘を受けてゐる筈である。親讓りの金でもあつて、喰ふには困らず、好きな本は買ふ、時には新らしい芝居も音樂も見聞する、それで世の苦勞、人間の苦勞などゝいふものに打つかりきらない人なら、一人よがりの何とか主義でやつても行けやうが、廣く見渡したところそんなものでは仕方がないと思ふ。一人精進する氣力があるなら、何故その勇氣を他にほどこさないか、一人享樂する境地があるなら、何故に後方に顧みないか、——これは少し脫線だが、佐藤氏に望むものは、僕等のそんな氣持である。自我に固まり、個人に終始してゐる生活は僕等には耐へられないことである。僕等の生活には最早や新解釋が

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

下され、新感情が生じてゐる筈である。僕等はそれに向つて猛進せねばならぬ。

甚だ脱線で申譯ないが、佐藤氏から受けた或る感銘を謝すると共に、或る注文をして擱筆する。（弘一）

劇『玄宗と楊貴妃』

近藤經一作

=十月の文藝座を観る=

近藤君のこれまでの作品を讀むと、君にはしかとした思想上の立場がないやうである、ある批評家は近藤君を愛を標榜する人道主義の作家のやうに言つてゐるが、それは誤りである、近藤君はさういふ作家になるかも知れない、而し今はさうでない、人道的な作品はあるにはあるが、さういふ作品には愛の意義から來るづるさが混つて、かなり不快なものである、かつて坊ちやんと小使を書いた小説などがその適例であらう。

近藤君にしかとした思想上の立場がないといふことは、決して批難す可きことでないと思ふ、君の態度は所謂人間派のある人々がとなへるいゝ小説主義の不決定さでない、一つの蕾が花にならうとする時の不決定である、突進の道程にある不決定である、而しその心には若い情熱が燃え上つてゐる、野心がある、漠然とした理想がある、この若々しい心から君の藝術は生れる――。けれ共、ある所に到達した時の君は、恐らく僕等の仲間でないだらう、近いやうに非常に遠い人となるだらう、それは仕方がない、僕等は世界主義者でも〇〇を肯定する立場にある、恐らく君はさうでない人だらう、

文藝座で上演した玄宗と楊貴妃は近藤君がこれまで發表した作品中で一番いゝものであるらしい、發表した當時多くの批評家は推賞したやうである、僕の知つてゐる範圍でも廣津氏や上司氏達がさうであつた、而し、僕はこれ等の人々の正直さには同感するが、何れも月評にありがちな批評上の緻密さを缺いてゐたやうに思ふ。この戯曲は近藤君のものとしていゝものであり、この若い作家の未來を考へる點に於て興味のあるものではあるが、決して推賞する程の作品でないと思ふ。實に澤山の缺點を持つてゐる、全篇を通じてすぐれてゐると言ふなら、全篇を通じて缺點だらけであると言ふ半面の批評が是非加へなければならない作品である、換言すれば、全篇を通じて生々しい情熱が燃え上つてゐるが反對に、全篇悉く效果を殺す饒舌でみたされてゐる。

その外不自然な箇所も隨所にあるし、幼稚な、見えすいた技巧もある、が、こゝではそれ等の事を是非することはぬきにして、自分がこの戯曲の上演を見て特に感じた二つの點に就いて言つて見たいと思ふ。

一は玄宗の心理についてゞある、玄宗は濃艶な楊貴妃を、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

自分の子から奪つて、自分のものとする。そこで武將である、陳玄禮や、張九齡は皇帝の畜生道に等しき不義と醜惡をかなしみ、女を奪はれた壽玉は嫉妬と憤怒のために劍をぬいて、遂に自分自身をほろぼしてしまふ、これ等の家臣の悲しみや、壽王の感情は、誰でも同感出來る、そしてそれは自然なことである、けれ共、我々の感情に何うしても理解されないのは、自分の子の愛人を奪つて、感情的に何等の激動のない玄宗の心理である、作者はこのことに就いて一言も語つてゐない、そのまゝパスしてゐる、さりとて、玄宗は壽玉を憎んでゐる譯ではない。僕の興味を感ずる問題はこゝにかくれてゐる。

奪ふといふことは常に權力者の弱者に對する態度である彼等の感情はこの點に於てまひしてゐる、近藤君に依つて書かれた玄宗は實に立派な人間である、皇帝の王冠を棄てゝも楊貴妃の愛に生きたいと願つてゐる裸の人である、自分の敵をも愛さうとする人格者である、而かも彼は奪ふことに於て遂に普通の權力者であつたのである、そこでこの作品は我々にかう敎へる『どんな人格者でも、赤裸の人間でも、彼が權力を握つてゐる時、その人格、その赤裸は全く嘘である』と。

恐らく作者は、かうした僕の考へ方を否定するに違ひない、『權力は握つてゐても、人格者は人格者だ』と、では僕は愬う答へる、

『作者が人間本然のこの一つの姿を（奪ふことの苦痛と悔恨）見落したといふことは、この作品の致命傷である』と。

舞臺上の批評は讀賣に書いた三島君の批評に殆ど同感である、今更くどく言ふ必要もないだらう、たゞかう思つた、勘彌一人うまい芝居、たゞ一人の役者のうまい芝居はつまらない、皆が上手下手のない芝居を見たいものだと思つた、舞臺裝置はすぐれてゐた、が全體に亘つて統一がなかつた樣に思はれた、

菊池寛氏のある兄弟を見て、廣津菊池兩氏の言葉を思出した。

『テーマを忘れなければ、いゝ藝術は君から生れやしない。』

『テーマを忘れたら、僕からは藝術は生れない』

何れもその人にとつて本當である、が藝術上の立場から言へば、廣津氏の言葉は的を射つてゐる、ある兄弟は菊池氏のテーマ戯曲の悪い見本である。

印象記『佛蘭西印象記』　精華書院　吉江孤雁著

いつか僕は僕がパリで會つた三人のことを書きたいと思つてゐた。それは他ではない島崎藤村、石川三四郞、吉江喬松の三氏についての印象である。そう思つてゐる内に、こん度計らず精華書院から出た吉江氏の「佛蘭西印象記」

を手にして、だまつて居れなくなつた。僕はその印象記を讀んで、人ごとでないパリの懷さを感じたのだ。あゝ僕のやうな貧乏人にも、金持ちと同じ惠みをもつて私の悲しいこゝろを汲んでくれたパリ、お前をどうして忘れよう遂ひこの間の晩、石川三四郎さんを送る可く、吉江さんや正俊や孝丸達と夕めしをともにした時も、始終フランスの生活の話をしたのであつた。地中海岸はアンチブのシヤレカロリで、私の友だちと云ふよりも兄のやうな錦侍の家で、吉江さんたちと一緒に暮した昔、朝にはバラ畑の身をとろかすやうな香に醉ひ、夕には天女の舞ひ出そうな森をさまよつたあの昔、私たちはよし金には不自由なことがあつても、何等の束縛がなく、常に勤勉なその日を送つた。僕は思ふ存分勉強した。岩に腰をおろしながら、砂地に横はりながら、遙かに遠いアフリカの空をながめながら、小羊の泣き聲を聞きながら。そうして、吉江さんは遠くで私の夢中な姿をながめながら、あまり無理をして身體を痛めぬやうにと私かに心配せられた。それから、私たちはあの熱い最盛り、南國の旅をともにしたことも忘れられない。私たちはアルルのアレヌで、塀越に驢馬に乘つて通りゆく人の姿を見た。土塀は高くなかつたので通行人の半身と、驢馬の首だけがゆつくりゆつくり通りすがるのを見た。その時彌沙の鐘が鳴り渡つた。私たちは無言のまゝ、寺鐘に澄み入りながらいたづらに廢墟にながらへて、昔を偲ぶのであつた。忘れ得ざる南國の旅。先夜も言ひ合はしたやうに、その話をした時、酒とあまりある感激に醉つた僕の手が震へた。そして、僕の熱しかけた眼は涙にぬれかけた。

僕の「佛蘭西印象記」を讀んだ感じはあまりに、私自身の想出に囚はれてゐるかも知れない。しかし、君たちも若い頃フランスに遊んでゐたら、きつと僕の今もつてゐる感情に打たれるであらう。かういふ感じの國であつたから、僕たちは一面、内的に戰爭の禍を心からしみじみ感ぜずにゐることが出來ぬのだ。しかし、僕は今茲に吉江氏のフランスで持たれた思想を描かうとするものではない。それは何時かの機會に於て、僕は前にも述べてあるやうに、石川、島崎兩氏の印象とゝもに、更らに言ひたい。僕はたゞ今夜かういふことを言つて筆を擱めたい。吉江氏はその印象記の多くを年が年中殆んど日光のあたりそうにもない、リユ・デユ・ソムラールの部屋で書かれてゐる。そして、僕には今でも吉江氏がやゝもすれば腸を害して、青ざめた顏でそこの寢床に橫つてゐる姿が思出される。今頃なら歸りにはきつともやが何日もひどかつた。そして、僕はサン・ミシエルの角で燒栗を買ひ、それで懷を温めながら、蒼いあの光つたメトロの階段をおりるのであつた。印象記を讀むにつけパリの吉江氏のことが思はれてならない。(小牧)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

俳句『ホトトギス』

ホトトギス雑詠をみる。十、十一月兩號を通じて。一讀細つそりした、輕い温みのある感じがする。そしてところ〲輕い險のある。私はいつも此の雜詠をよむごとに、泊雲、草城兩氏のことを想ふ。泊雲氏の何時も眞面目な、しつかりした寫生句とそして、草城氏の獨特の才ある句をみるのである。ホトトギスが俳句の大道を進んでゐるのなら、その代表者は泊雲氏であらねばならない。それだけ氏には餘裕がない。そして一句々々可成苦心した跡がみえる。私は實に尊い苦心だと思ふ。ホトトギスが年來の主張たる平明にして餘韻のある句にいたる道程としてならば、可成苦心のあとある、つくつた跡の（此のつくつたは、心のうそをつくるのではなく、十七文字の言葉のつくりである）ある泊雲氏の現在の句は當然ゆるさなければならない。數多いつまらぬ寫生句の中で氏の句が一段と光つてゐると云ふことは眞によろこばしいことだ。句の上手下手は別にして、作者の本當によい所をつかんだ寫生句は尊いものだと思ふ。本當の寫生句は、ひとりでに自然の季が入り、例へ十七文字が多少、ぎごちないものでも、ちつとも嫌みがしない。或る人の樣な十七文字をこねり上げて砂糖をかむ樣な、嫌味がない。とにかく眞面目で、そしてくだらぬ努力に走らないからだ。然し今遺憾乍ら此の兩月の雜詠中には、句の代表的句を見出されなかつた。で私は、敢えて今茲に上げなかつた。次は草城氏だ。氏のは如何にも新しい氏獨特の句だ。そうして、さつきのべた、きり〲つとした少し險のある（此の險がたまらなくよい。そして又時々は又氏にとつて最も恐るべき月並的な、作り句に、なることもある）句だ。好い方を代表したのが

朝寒や叔父の若妻もこは何（？）

散るのみの櫻となりぬ嵐山

殊に、嵐山の句は私の最も好む句で、一見平凡にみえて、靜かな又泰然とした句だ。嵐山の實景をみたものでないと、此句の氣分は味ふことが出來まい。惡い句を代表した句は

扇風器やゝに止れば無表情

私は始め、此の句をよんだときその驚るべき、技巧にみせられたと同時に、つまらぬ句だと思つた。「〇〇〇〇暑さ哉」が月並ならば、此の句も月並な筈だ。それから、近頃雜詠中によくみる。技巧のみの修業時代の句の樣な、一寸お上品にみえる「夏痩指反らし競へに負けはせじ」なごの句は當然滅ぶべき句だと思ふ。ホトトギスが、昔風の間違つた浪花節的な、「や哉」を離れて少くとも新しくならうとしたゝめに、多少こんな句も出來て來たのも仕方ないが、もうこんな、句はごん〲排すべきだとにかく以上の二氏は最もよくホトトギスを代表し、又よい作家だと思ふ。終りに言ふホトトギスは、もつと〲寫生句に忠實にはげん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で、そしてやがてはその寫生の中に、しつかりとした自分と云ふものを見出すことだ。ホトトギスに就いてはもつともつゝ言ひたい然し又他日にゆづる。最後に魚將氏の好きな一句を見つけた。「漕ぎ出して渡舟流るゝ野分かな」

附　言

今度出來た「枯野」が俳諧史に俳論に又「俳諧文學」が連句に大いにつとめられてゐることは眞によろこばしい現象だと思ふ。(默太)

美術『未來派展』について

——未來派繪畫の社會性——

而し乍らと前號へ次ぐ。

既に展覽會に眞なる藝術價値を全否定し了つた後、而も理論の之と、事實に物なる展覽會そのものは存在する。少く共或根本制度の△△後迄は續き行くべき此の運命若荷の現實なる展覽會そのものを、而も醱酵强い此のものを、何時まで無關心に批判圏外へと放つぱなした譯にも行かないであらう。が而し既に物なるに至つて事は全く簡單であるべきだ。殘つたものはたゞ物そのものに二大別の社會性なると非社會性なるとの價値區分を與へる許りなのだ。物としての價値の肯定及び否定は、集團なる物の物として此處に物なる容量、力の價値効果の如何にあるのだから、若しそれが醱酵力に於て或社會の目指す進行を阻止する力であつたとしたなら、最早物として消極的な無視手段をば越へた破壞手段を向けるも又當然である。で既に云ふ如く是は藝術批評の境線越へたる低劣排個の物として、故に形而上學的藝術評ではなく巧利的概念の物としての展覽會評に終へる筈なのである。

展覽會として前號を加へ以上一樣同理由のもとに美の否定は了へた。物としては今から展げるのだが色感効果上からしてが、近代的であるべき筈の二科展などの帝展に比べて非社會的である事實は何故の理由か。前者は社會的に無定見な而し藝術的には自覺級と許された、夫丈に現實相の確執された所はあるが、其現實相とは作者自身の根元的希求大眼の皆無な故に暗い現社會相に戯れたのみの反映そのものなのである。後者は社會的には同じ無定見でありながらも無個性な無理論的な無自覺級であるだけに甘い遊戯の享樂によつて作られたものにも色感上の或効果あるが見らるゝ。形象上より言へば前者は現實遠いグロテスクの世界であり、後者は間近い實體の標本であるからだ。苦暗い世間生活の第三民衆や無趣味者にとつて一瞥通り抜に、明い快感と實體標本なる帝展があるのは當然だし。明い安慰な生活の物持や智識階級や似非物識者にとつて暗くてこせ〳〵したグロテスクな色と形の享樂境なる二科展のあるのも又當然だらう。ダイヤを指した手が錆を享樂し、暗からは光へ憧憬する兩者それ〴〵の心理なのだ。で若し簡單にも此の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

通り色と形の上のみから社會性の有無又は社會的効果をば物の上にあげやうとするなら、現在それは未來派繪畫の展覽會に出づるものはないであらう。何故なら、無教養なる民衆は繪畫といふ象型的既成概念をば取棄つる事によつてのみ、色感の明快さに、強いフォースラインに、畫面上へ視覺の交響樂的遊離享樂を自由に得られたりす、前二者に增した快の効果が得らるゝからである。物體の再現でない限り形に對する疑念は無論なく、會場一巡に依て生れ持ちたる儘のその目に實に大交響樂と力の快感が易々して收得せらるゝからなのである。これは無智の民衆が、現實形體と對比して二科等の畫を見る時、グロテスク形體へ疑念の起くべき當然な即ちそれに對してある智のカルチュアを必要とすること、等が不用となり、視覺に受けた感覺まゝの享樂だけで善い譯になるからだ。二科傾の新人は言ふであらう。偉な傑作に形や色のグロテスクは問題ぢやない、モチーブは主觀である、それは既に第二視智覺であると。勿論其處だ。(その第一視覺とは全く物象形體のない感覺である。それを未來派畫家は流動の哲學理論にはめて畫くのである。それは二科傾新人のいふ抽象言の感覺ではなく、全くその儘な生感覺そのものを、自然形體を借りずに線と色許りで表現するのである。)然し作者二科傾の畫家は自作を公表するに及んで臆面なくもミケランヂエ・ゴーグ等に比し傑作呼ばりをする勇氣と信念があるか。蓋し又現社會に存在する展覽會は物である。それらが集團の物なる展覽會は既に否定し終つた。

畫家にも觀者にも第一視覺の瞬間に物象形體はない。(未來派畫家は對象自然に依らないモチーヴを持つてるが)その感覺その者こそ平等なる無産の人間と交渉する。それは美が邪魔な衣を着けないから、裸である無産の人とも交渉出來得るのだ。自然形體といふ衣を着けた美が近代に入つて整理屋科學の爲に昨日刺された。刺された美は衣を棄てゝ眞裸となつた。眞裸の美が本當の言葉をかけ本物の體を見せるのは當然である。本物の言葉をかけられ本物の體を見て親密に抱擁しないものがあらうか。それは必然だ。美は勿論特殊な畫家のみの專有ではなく遠く人間の共有であつたのだ。それが長い歷史の間に特殊部落の畫家と有權者が私有に掠奪し終つたのだ。而しだ。遠い偉大な藝術品は自然形體の衣を着けてゐた。而もそれはまがいない美であると許され來た。何故なら當時美は整理屋科學の居ない時代にあつて衣が必要だつたからで。それとて實に衣が體に無理しない美の扶けをしてゐたから衣も美であつたからなのだ。整理屋科學出で、美を隱蔽する衣は昨日刺された。美は今裸であるべきである。而し現在裸であるべき無形象藝術が遠い衣を付けた藝術に代はる事が出來得てゐるかどうか、嚴密にそれは疑問だ、否といふかも知れない。而し現在に美は裸でなければならないといふことは事實だ。こ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すると尠く共一人多少裸の可能性を有したこの未來派藝術に、まして此處では此の集團機關を物として見てゐる時、一人社會性の存在するを認識し得て幸する譯なのである。社會性存在の認識は今言つた如き裸の可能性を物の中に包含するの故である。物としてのこの機關には快、力といふ社會性そのもの以外は無駄ものである。それ以外に言葉や理論があつたら嘘である。畫家自身も此の無形象イズムに至つてやゝ思ひ切り長い自然對象の奴隷から漸く自由に解放され盡した譯である。

而し未來派少く共日本の、未來派模倣の人達が僕のこれだけの簡單な物に對する社會的エフエクト理由を付けさして放つて下さつてくるゝだらうか。否早速そんな簡單な横道へは置いてもらうまいと一九一〇年宣言の何條か何かを理論だてるであらう。けれども畫面とはその外皆嘘である。まして僕は日本未來派の餘戯的藝術には此の簡單なる讃辭と言へ共半減にしてまだ提上出來ない。云ふ讃辭とは一般生活の苦闘にある本物未來派に於てなのであるから。

社會的に見て未來派藝術の史的發生動機杯は面白く又非常な有意義さもあるのだが、要するに畫は畫面の言葉以外に出でない無口な者なのだから、價値とは勿論此畫面的効果よりのみ見て、他の既成藝術に比し現代生活に一層な社會的効果を發見し得る譯なのだ。故に理論として畫面効果の解剖以外に、未來派宣言などゝ云ふ言葉種の者へ至つては勿論無視し盡してゐる譯なのである。けれ共畫面の言葉以外に出て兄達が今言つた社會的意義の簡單さを不平するならば、理論上にある未來派としては僕は大反對なのだ。何是なら彼等は伊太利一國の見地に閉籠つて固いナシオナリストを自認してゐ、一方でミリタリストでもあるからなのだ。而しそれも善い。も少し大きな客觀の眼をもつてする時それら言葉には何も力の潜在がない。時代相の混亂や暗闘や各層に集ふ力の闘爭や破壞相やそれに歴史の伊太利なる國が交叉織なされたりして、彼等は現實の舞臺を跳ね廻つてゐる蚤の愉快さ恰好だ。いや彼等は佛のモークレール氏の言ふ如く實に嫌味を持たぬ元氣善い花形役者といふ丈で理論の國を許さなければならない。彼等は大力を無な意識に受ながらも大自在な光の如き自認してゐる。其我儘も善い。彼等は現實生活の讃美者であり謳歌者であり ベルグソニズムをくむ一種でもあるだけに、無定見的天才的主我行動にも、社會の動き行くべき或力に於ける價値を包含してゐる譯なのである。理論は最早問題でない未來派の仕事は事實の上に効果をあげてゐるのだ。而も此創業は十一年餘も前の事である。今先輩彼等は彼等自身に依て宣言した如く後輩の新人に依て喜び刺さるべき時であるのだ。新人は彼等の畫布を燒いて赤々した火に手をかざすべき秋であるぞよ。に何故か未來派後輩の彼等は技巧に機關に宣傳に萎縮し切て十年前の模倣をまだ白々しく續てゐるでは

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ないか。舊輩彼等にしろ十年後の今は大分な變化である。毎年僕の側に宣言書や展覽會案內狀や書籍が送らるゝのを見るとまだ〳〵十年後の彼等は元氣であるらしい。それだのに日本の若い模倣者兄等は十年前の運動の儘なのだから耐らない。而し何でも善い未來派の名稱に拘泥の必要もなく今の社會の上にて行くべき方面は一つである、大きな自覺の眼に社會的快と力を目指すが善い。展覽會の意義は其處で民衆と交涉し、物の使命は唯その一つあるべきのみだ。

この繪畫が畫面上によつて社會的効果を收めるといふには、心理學的質も勿論だが量即畫面の大きさがより重要になつて來るべきではないか。上野山下に開かれた未展には質は勿論、遺憾乍ら第一に必要な此量が缺けてゐた。一體物として見る時、官學的な寫形の藝術でさへ量の大きさによつて觀者收覽の社會的効果の大部分占め得られてゐるに、未來派の無形なる感覺的畫面へ何是當然第一條件であるべき此の量をば忘却してゐたか。兄等にはまだ慣らされたる過去派の執着が大きい。當然新興藝術の自覺意識もなく、結果は兩者の中間に彷徨する矛盾そのものである。當然內容の無自覺さはこれら作品の總てに裏付けらるゝ。量の閑却も此の表れの一種だ。

第一自稱「露西亞未來派の父」なるブリユリユツク氏の作からして、又協會の主事的立場にある木下氏の作からしても實に空嘘な不徹底さをみせてゐる。他はおして知るべきである。ブ氏のものさへ嚴密に勿論それは未來派でない。然しまだ四面楚歌中の過渡期が中にある未來派として過去派に於ける寫生の如き教養習練は必要であらう。が而しそれが未來派藝術そのものではない。それを並べて恥ぢないは自ら藝術自覺に於ける貧しい內容を裏書きしてゐるに過ぎない。これは寫形の過去派の素地とするデツサンに比例したものを出でない。全くブ氏のものその他大部分が未來派のデツサンとも名付くべきものなのである。外人の量及色よりレベル下つた漢字名の中には、小品構圖である穴明共三氏の「下より上への行動」外一點に於ける赤カの脅威さ、森田政之助氏の「コンクリート混合機の運轉」喧噪の悪魔的快感。も少しレベル下げにしてボチオニに模したが如き立野氏の「スサビゆく狂亂」、大浦氏の結核病者吐血に於けるが如き三點、尾形氏の「朝の色感」、リユバルスキー氏の版畫、バルスラバンの「酒場」等は中でも善い傾向の眼があつた。

唯今迄言つたやうな大きい自覺が欲しいものだ。全體から量の關係にもよるのであらうが、日本名に比して外人名の作品は格段の差があつた。理由は地方色の關係にもあるが、外人彼等の作畫動機そのものは無自覺の中にも常に一義的な彼等であり得るせいであらう。ヴ氏が浦潮の夏を描いたものはまだ質量共に塲中一等完全近かつたやうだ。小つぼけな彫刻類は實に愚作である。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日本の國に能動的にじたカンデンスキーがゐないものか……兎に角展覧會として一等讃辭をおしまない故に畫壇にアンニュイな僕が急いで是だけを書き終へた。

――十一・十一――(正夢)

音樂批評の二側面

音樂批評を開始するに當つて、從來當然なされるべくして、しかも嘗て述べられたことのなかつた音樂批評の問題について、一言述べておきたい。此音樂批評は日本にては正當に意識されたことがなかつた。こゝに音樂といふのは、もとより西洋音樂のことであるが、その批評は、一面には音樂が日本に理解される質に關聯し、一面には演奏も正當なる位置を占めてゐなかつたゝめに、必然的にその任務を果すに至らなかつたのである。從來の樂評といへば、極めて漠然たる印象批評に止まつてゐた。それすらいゝ方の批評であつて、多くは會場の記事を以つて充される程度のものであつた。余等、音樂を愛し、同時にそれを研究するものにとつて、それがいかにも物足りなかつたのである。

音樂は時間藝術である。そこに他のすべての藝術と異るところが存する。しかしながらその差異はたゞ相對的のものであつて、ことに近代時間觀念と空間觀念の變化に伴つて、音樂を他からその點で區別することは出來なくなつた。たゞ主としてその點から區別されるといふに止まる。他の藝術に於て、主として空間によるものは建築と彫刻であるが、それすら時間性を認めなければ理解されないのであるから、建築彫刻と音樂との中間に存する他の藝術は悉く創作の側に於ても、批評の側に於ても時間性が認められなければならないのである。文學批評の如き、殊にさうである。その詳細なる論述は他日公にする所存であるが、こゝには特に音樂に於てその點の著しいことを指摘して置く。この點に關して舞臺藝術がまたそれに多少似てゐる。

時間藝術の得徴はそれが演出藝術なることを必要とする。それは一つの樂譜があつてそれを演出するのであつて、劇と同じである。その各演出は、しかしながら、決してその譜によるものでないことは、一戯曲の再演が決してその初演と同じからざるのと等しい。譜はたゞ演出の機緣であるに過ぎない。各演出は演出のみに於てその價値が見出し得る。作曲家はそれの作曲したときの思想、感情、抱負、解釋等をもつのであるが、演奏はそれといかに異つてもいゝわけで、演奏家それ自身の思想感情解釋等を以てすべきであるそれでなければ音樂にはならない。こゝに於て古音樂の再出が意義があり、また新作の意義がある。

音樂批評が何であるかは姑らく措く。それは批評そのものゝ本質にも關聯することであつて、とうていこの小欄に於て決定しがたいところであり、又余がかねてからその點について論述したこともあるからである。故に批評は印象

批評でも客觀批評でも何でも結構である、問題は音樂（及び劇）批評に存する二側面のことである。それは新作の批評に於て特に問題とならざるを得ない。それは何であるか。

人が常に混同するのはその點である。音樂は姑らくとして劇評の如きは、（余の眼から見れば不充分な點が多いとはいへ）日本に於て充分になされ、しかも今日も盛に行はれつゝあるにもかゝはらず、しかもその點が混同されつゝある。その點こは何であるか、それは作そのものゝ批評と、演出そのもの（の）ゝ批評とを混ずることである。作は作曲家の創造したるところのものである（それを假に樂譜で表はしてゐるが、樂譜は決して作品でない）即ち假にベートーヴェの第五シュムフォニーをとれば、このシュムフォニーは全部一個の音樂こして認められ、又それとして存在する。それはベートーヴェンが假に譜に殘したものによつて吾人に殘されてゐるが、それは音によつて構成された一個の音樂藝術である。音樂批評の一側面はかゝる作品そのものに集中される。批評は第一にそれの主題なり、展開なり、歴史なり、又技巧からいへば和聲なり、コントラプンクトなり種々の方法に對してなされるのである。さうして批評家がいゝ、わるいを斷ずるのは、全く文學評家が一文學作品に加へるのと同じである。――それが作品への批評である

第二の側面は演奏の批評である。一作品は音によつて構成されてゐるが故に、作曲家が希望するところの音樂は必然に定められる。演奏がその通りに出れば、演奏に對する批評は存在せず、たゞ作そのものに對してなされるのみである。もし演奏家がその自己の解釋を用ゐれば、そこにはじめて新演奏の意味があり、演奏批評も生ずるのである。これは他の點からいへば、演奏技巧の評ともなるが、しかし演奏批評が必然に技巧のみの評こなる理由もない。

以上の二つは、こゝに指摘するまでもなく實はみなよく分つてゐる筈である。それにも係らず、今日のわが樂評を見ると、それがよく發揮されてゐない、その點について、余は常に遺憾を覺ゆるのである。さうしてそれの混同されてゐることは、今日の如き幼稚なる樂評時代にあつて、しかも新作に面するときに暴露される。即ち今日にあつて、演奏家の多くは、ただ技巧のみしか知らないで、作そのものゝ解釋力が不足であり、批評家の大多數は技巧を知らないで、たゞ感じだけを味ふのを得意としてゐる。二つの危險である。ことに技巧のみを主とする演奏家にあつてはいゝとして、感じにたよる音樂評家こそ怪しいものである。樂音の感覺、感情は、純粹の色の感じこ同じで、いかなる樂音といへごもある感じを與へ得る、そこに素人の誘惑される虞れがある、音樂的素養のない人には、（ことに日本人の如く和聲的敎養のないものには）美しいメロディさへ與へればすぐに「いゝ感じ」を味ふが、複雜な音樂的構造の多い作品には、殆ど「感じ」を得ない。かゝる耳から來る印象

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

批評の危險なことはこゝにいふ必要もないほどであらう。

かくして一新作が演出されるとき、作品そのものは未だかつて耳に觸れてゐない。そこで人はこの感じを演奏から得るのであるが、演奏が極めて下手であつても、作にメロディの美しいものでもあれば、「いゝ感じ」を得て、すぐにその音樂を（作と演奏とを一所にして）ほめる。之に反して作品がいはゆるいゝ感じを與へなければ、たとひいかに演奏がよくても、その演奏の努力は忘れられてしまふ、——それが印象批評の危險である。さうして批評の二側面が混ぜられるのである。

古來の作品の批評に於ても、今日日本に於てはじめて演出されるとき、日本の評家は同樣の危險に暴される。ベートーヴェンの名はわれらに熟してゐる。さうして文學的陶醉によつて、彼を樂聖として謳つてゐる。それが一作品でも初めて演出されたとせよ。作品そのものゝ批評を忘れて無條件にそれに參るのが一つであり、また演奏の努力を忘れることもその一つである。即ち日本に於て新作の意義は二つあることになる。

次に知られたる作の批評に就て、同じく二側面の混同の危險がある。それは聞く人はこの作品の內容を充分知つてゐるがために、その內容そのものゝ批評を新たにすることをネグリジエして、つい演奏批評のみに耽りやすい。その作が一定の評價を以つて、批評家に接してゐるにしても、批評家の心理は刻々に變ずるがために、曾つて愚作と信じた作品も、時にいゝ作となることがある。それの變化に注意せず、その變化さへも、演出にかゝるものと見るとき、批評の混亂が起るのである。

以上はたゞ極めて簡單に音樂批評の二側面を說いたのであるが、その所言がもしすでにもしそれが樂評に於て無用のことゝなつてゐるならば幸である。同時にこゝには、その態度をのみ說いたので、音樂批評そのものゝ內容論には觸れてゐない。それは追々出るであらう。（正俊）

映畫「カラマゾフ兄弟」其他

一般的な映畫論を俺にさせれば、前號の賢三の映畫論とは殆んどマルキリ反對なことを云ひたいのだが、今はさうしてゐる暇がないし、それに貧乏なこの雜誌では『堂々數百枚』の映畫論を俺にさせる程の贅澤味も紙面に無さ相だから、簡單に、最近見たものゝうちから二つ三つ憎まれ口を叩いて置く。

△カラマゾフ兄弟（電氣館上演）——

ドストイエフスキイの小說『カラマゾフ兄弟』を獨逸のマキシム會社で映畫にしたものであるが、この際、原作に忠實であるか否かを問ふのはやめて、與へられた一個の獨立したフィルムとして見る時、先づ成功の部類に屬する。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三人の兄弟も、スメルヂャコフも、おやぢのフョードルも、亦、二人の女性——カテイエリーナ、グルシエンカーも、皆相當に、役々の個性を發揮してゐるが、特に、アチイストのイヴァンと、白痴女の息子スメルヂャコフとが、俺には一番氣に入つた。

撮映法も先づ宜し。唯、説明は例によつて感心しない。殊に、最後の大團圓を擔當した説明者が、「現在のロシア」云々などゝ附け足したのは愚の骨頂で、然も原作者の意志を傷付けるものだ。以後注意し給へ。

△「花嫁人形」（同館）

やはり獨逸製の喜劇だ。

久し振りで、喜劇らしい喜劇フイルムを見せて呉れたことをユニオン會社のディレクターに感謝する、同時にアメリカの愚劣な監督や役者共に唾を吐きかけておく。

この寫眞の特徴は、舞臺藝術と映畫藝術とを巧みに融和させた點にある。そしてそれが可なり成功してゐる。この種のフイルムに附き物の厭味も無い。筋も一寸面白い。修道院のアラを曝け出したところなぞは頗る痛快だつた。然も、たゞ痛快がつてだけはゐられないものを提供してゐる。

電氣館の經營者に云つておく。君の方で、今後全くアメリカものと絶縁するならば、俺は大いに提灯を持つかも知れない、持たないかも知れない。

△「Good bye yo thi」（キネマ館上演）

伊大利ものだ。

先づ最近見たものゝうちで、佳いと思つたものゝ一つだ。第一に嫌味がない。第二にコムポジションが面白い。第三に、見てゐる俺自身が、作中の人物と一緒になつて、ノンキに遊びまわることが出來る。つまりこの作の中へ觀客の全心を引つ張り込んで行くところが、この作の値打だ。

總括して云つておくが、由來民衆のための藝術として生れた映畫劇も、今や亦變な奴等の獨占物になりかけてゐる。注意しないと危ないよ。（斜搭）

誰にも解かる **相對性原理の話** 淺野利三郎編纂

昨冬以來我國に於てもアインシュタインの學説が雜誌其の他の刊行物に依って殆ど流行的と見ゆる迄に紹介されて居るが、其の相對性原理なるものに彼れ自身をして「之を理解し得るもの世界に於いて恐らく十二人を出でまい」と傲語せしめた程に難解な代物であつて一般讀者に理解せられない憾がある本書は之を何人にも能く理解し得るやう親切に通俗的に問答體を以て記述したもので便利な本である。

（本郷區弓町日本評論社發賣）

菊池寛氏への公開狀

―「法律の轍」の跋」を讀んで―

叢文閣編輯部　涌島義博
橋浦泰雄

うちのおやぢは余んまり下らんからよせといつたが、叢文閣編輯部員として、他の多くの文壇の方々にお頼みに上らねばならぬ職務を持つてゐる自分等としては、誣妄を正して置く必要を感ずる。

又此原稿の掲載をはねつけた某新聞の某文藝部主任に敎へて置くが、公開の文書に對しては、公開狀を以てするのが禮儀だよ。「菊池寛氏との對談で解決する問題だ」などゝは出過ぎたおせつかいである。

「ナヤスチス」改題「法律の轍」の跋を讀んで私共のまづ一番意外に思つたことは、あれが誰かの下譯とか、代譯とかに成つたものだといふことであります。さういふお話はお約束の當初から、破談の當時まで、貴方から噯にも洩らされなかつたと承知して居ります。即ち若し爪の垢ほどでもそんなことを耳にすれば、潔癖屋のおやぢが貴方と交渉を持つ筈がありません。又貴方は現下文壇の最高位を占めて居られる、極めて有名な才人であらるゝと知つて居りますが、さり迚私共は、貴方の御人柄を鰯の頭ほどにも信仰してゐるものではありませんから貴方のお名前を難有がつて代譯下譯の「ナヤスチス」をお約束した譯では決してありません。

「ナヤスチス」出版の話は、うちのおやぢが最初、さる人から、某劇團のために骨を折つて飜譯したのに、劇團が上演しない爲、菊池は原稿をもち扱つてゐる」との噂を承はつたのに起因してゐます。貴方の常に自慢せられる日本の小說、殊に流行つ子たる貴方の小說なら、苟めにも「持扱ふ」など、いふ失禮千萬な噂の立つ筈もありますまいが、何んしろ有名な貴方にして、尙且つ持扱つて居られる飜譯原稿なら、當方としてはその直ぐ前に、同じ作者の「爭鬪」を出版した關係もあり、旁々出してもいゝといゝといふので八月の暑い日盛りを、おやぢは自ら參上して、その噂の實否を確めた所、貴方はその事實を承認し、且つ「原稿は夙くに出來上つてゐるから何時でも渡せるが」といつて、貴方から新に提案されたことは「君の方でも賣れる方がいゝだらうから、序文代りに稍詳しいゴオルスワアゾーの評傳を書き添へて渡したいから九月十日まで待て」とのお話で、この出版契約は成立したものであります。

然るに九月十日はさて置き十月、十一月

になつても更に御消息がなく、――有名な貴方は相手方の迷惑などは御眼中にありますまい。――十二月も押しつまつた三十日といふ日に、突然一少年を使ひとして、一通のお手紙と、色々な紙へなぐり書きした原稿とをよこされました。御手紙には、只「遲くなつて濟まぬ」といふことゝ『手傳ひのものが金が欲しいといふから百圓渡せ』とお認めになつてゐました。この『手傳ひの者』といふことは私の方には了解が出來なかつた――今は漸く了解しましたがね――のですが、それは畢竟口實で、實は貴方の御入用であらうが、有名なプチブルザヨア菊池寛としてはさうもいへず、假りに「手傳ひのもの」と仰有つたことゝ解釋してゐました。それは兎も角として、貴方から御提案のゴオルスワアジー評傳は遂に原稿の何處からも發見されませんでした。又お手紙にもあの序文のことには一言も言及されてゐませんでした。一體之はどうしたことなのでせう。原稿は巳に八月以前に出來上つて居り――尤も「跋」には御都合よく書かれて居りますが、おやぢに仰有つたのは正に貴方のお手になつた飜譯が八月以前に出來上つて居つたのです――それの引渡しを九月十日に延ばされたのは、全くゴオルスワアジー評傳を書添へられる爲ではありませんでしたか。それを更に勝手に十二月三十日に延ばされたのは、序文を外にして果して何の故と解したらいゝのでせうか。序文が添はぬものなら九月十日と提言されたことも無意味なら、勝手に十二月三十日に延ばされたことも無意味になります。「遲れたから濟まぬ」のではない「約束の序文を書かぬから濟まぬ」のでせう。「序文を書くから延ばして呉れ」と言ひ置きながら、八月以前に出來たまゝの原稿を、序文のない原稿を、十二月末に突然押つけられたのは正に「約束に背いたから自分が惡いのは無論である」のであります。私共はあなたの御多忙は察してゐます。貴方は現文壇最高の水準を占められるはやりつ子であります。將棋も表藝のお一つださうですね。だから、私共二三流のちつぽけな本屋の催促狀などは御眼中になく、隨つてハガキ一枚の返事を下さる時間すらお持ちにならぬのは格別不思議はないのでございませう。ですから、十二月三十日に序文の添ふた原稿を下さるか、又は序文の書けぬ斷りを一言でも仰有つたなら、おやぢは多分貴方を「不愉快」にはしなかつたでありませう。それに對しては沈默を守られ、洒々として、「手傳の者に金をよこせ」とは流石に貴方でなくては言へないことだと私共は憤りました。貴方の如き大先生がかういふ態度を取られ、それに對して『雜誌社出版者』は常に御無理御尤とも泣寢入りするのが本當なんか知りませんが、私共には私共なりに小さな虫が蠢いてゐますので、無責任、傲慢、增上慢に對しては如何に處すべきかを知つてゐます。だからあの少年氏におやぢが傳言し、尙傳言違ひを虞れて更に、手紙にして貴方に差出さうとしてゐた際に、私共はおやぢに「柄でもない妥協は止めて、あんな不都合な、自分勝手な、失敬な奴とは斷然手をおきりなさい。そんな無意味な百圓なら、僕等に飲ました方が余つぽどましだ」といつたのでしたが、おやぢも案外實氣もあるのか、それとも貴方の有名を氣にしてか、世間並みの泣寢入り黨になりたかつたのか、神妙にも「數回御催促申上げ御商で返事もなく、いつ頂けるやら分らぬから、明年(即今年)上半期の出版豫定には入れて居りませんが、下半期でよろしければ無論出版しますから何分の御返事を待つてた上

百圓は何時でも御渡し〻ます」と少年氏へ傳言の通りを書いて投函したのでした。このおやぢの手紙は着かなかつたと仰有るのでせうか。手紙は着かず、少年氏はおやぢの云はれた通りに傳言を誤つたとすれば、貴方の仰有る「自分が約束の期限までに原稿を送らなかつた爲、出版の時期を失したからお斷りするといふことであつた」も成程御尤もかも知れませんが、有名な貴方としては余りに頭がお悪い。何故なら、若し出版の時期を失したといふのが本當なら、出版の時期は十二月三十日に、原稿の面を見てはじめて氣附くべき事柄でありませうか。十二月三十日以前に何故お斷りしなかつたのでありませうか。不肖ながら、おやぢにしても、私共にしても、貴方の如くそれ程に多忙でも健忘症でも、無責任でも、暴慢でもありません。「意外」「不愉快」は一體誰の口から出すのが一番正當でございませうか。

最後に私共は貴方から代譯、下譯のお手盛りをまんまと食ひ損つたことを、且つ永久に貴方と御絶緣し得たことを、同時におやぢが「有名」を憚らなくなつたことをわが編輯部の爲に祝して筆を擱きます。左様なら。（一九二一・一一・一日）

附記

此公開狀の爲に「一般的でないから取上げぬ」などと利口ぶらず、有名な公人の德義問題は一般的な問題であるとして、貴重な紙面を割愛して下すつた「種蒔き社」同人に深く感謝します。

太陽のめぐりめぐりめぐりて吾は行く足音たてず限りなき道

再度の渡佛に際して

石川三四郎

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

世界欄

勞農政府の報告

勞農政府は饑饉救恤に關し八月三日各國政府に向け大要次ぎの通牒を發してゐる。「西部歐露一帶の凶作は歐米諸國に於て甚深の同情を喚起してゐるが、(註、日本は例外だ) 各國の救恤委員會、新聞社及び各國政府に饑饉の實狀が善く知られてゐないのは遺憾である。歐米の新聞や政治家の記事雜話は或は甚だしく誇張せられ或は全く誤れる報道が傳へてゐる。故に勞農政府は茲に饑饉地方の狀況に就て聊か其實狀を報道し參考に供し度いと思ふ全露救恤委員會の調査によれば、饑饉地方はアストラハン、ツアリチーシ、サラトフ、獨逸移民コンムーン、サマラ、シムビルスク、タタール共和國、チユワシ共和國の八地方とウフアー、及びウヤートカ兩縣の一部である。この十地方は旱魃の結果平年作より一割乃至一割五分の減收となり、或る地域では單に若干農作物が被害を蒙つたに過ぎない。而してこの十地方に於ける人口は約千八百萬人である

饑饉地方の住民に糧食供給せんが爲には平時の需要高を半減し且つ家畜の飼料を計上しない所で、約千百萬布度(一布度は我か四貫三百八十二匁)を要し、而して更に都市住民の需要穀物は千七百布度である。不作地方には無論貯蔵穀物がない、他の地方からどれ程餘分の穀物を供給し得るかは目下の處不明に屬する。災害は實に非常なものである、然し之が爲め暴動や百姓一揆の如きは未だ何處にも勃發しない、饑饉暴動の起つてゐるかの如くに傳へてゐるのは皆外國電報の捏造である。災害地方の住民は他縣に移住しやうとしてゐるけれども之が爲に無秩序は起らない。政府は着々救濟策を講じてゐる。政府は共産黨以外の代表を網羅せる委員會を組織し、委員を海外に派遣することになつてゐる。終りに本政府は各國政府が救恤委員の事業を妨害せず又各國の團體が應分の援助を與へんことを希望に堪へないものである」。(國際事情に據る)

かうして、野蠻國ロシアの不幸な災害地方の作民は他縣に移住しやうとはしてゐるけれども之れがために無秩序は起らないそうだ。それにしても、日本の現狀はどうだらうか、地主と小作人はどうだらうか。

從軍者のインターナショナル

Internationale des Anciens Combattants

從軍者のインターナショナルはこん度の戰爭に參加した人達の非軍國主義運動である。

從軍者のインターナショナルは昨年四月廿一日、五月一日、二日のジユネヴ大會以來非常な活動をしてゐる。"National Union of

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Ex-Service men" はイギリスに於ては動かすべからざる勢力になつてゐる。それが加盟して來た。そして、その幹事長は H. W. Butler 氏その人である。アメリカでは今回 World War Veterans が加盟して來た。オーストリアに於ては、Reichsvereinigung chemaliger Kriegsteilnehmer (Arbeiter und lan arme Bauern) が唯一の機關になつて動いてゐたのであるが、今年二月のウイン大會で從軍者のインターナショナルに公式に加盟することになつた。その他、今では、Reichsvereinigung der Kriegsinvaliden. Frie Vereinigung Deutchoesterreichischer 及び Zentraverband der Kriegsinvaliden も亦之に加盟しやうとしてゐる。その他ブルガリアに於ては L'Association edes Anciens Prisoniers de Guerre は今年ヶ月の大會加盟を可決したらしい。同協會は目下同國內に支部六百を有するそうである。

かうして成立以來一年經つか經たぬ間に世界の國々の從軍者たちは敵も味方も入亂れになつて反戰的に或る世界運動に加らうとしてゐる。これは怖ろしいことだ。世界の純良な兵隊さん達を食ひ物にして來た資本階級とその政府はこの事實を前にしてどう考へるだらうか。

第三インターナショナルと萬國語

萬國共産黨とエスペラント問題は鍛れ鍛れの議題であつた。次に右に就いてのモスコウの打合せを紹介すると、今月一月十二日 Joseph Pogany (前ハンガリア教育人民委員)、Henri Guilbeaux(佛、著述家)、Wachs (第三インターナショナル英文記事編輯委員)、Hans Itschner の四名はモスコウに於て「第三インターナショナルと萬國語問題」に關する協議會を開いた。そうして出來上つたのが、「萬國共産黨萬國語期成會」で、上記四名はそれが委員となつた。

期成會及び第三インターナショナル委員及び關係者の聯合協議會は次ぎのやうなことを決議してゐる。

「協議會は各國の共産黨及び共産國家のために萬國語の必要を認める、さりながら、期成會は目下の處、エスペラントか、イドを即時に採擇しやうとするものではない。寧ろこの際いづれの萬國語が最も實用的であるかを考究せねばならぬと見做す。この意味に於て協議會はこの問題を各國の言語學及び哲學の専門家に研究してもらふ方が一番適策と考へる。そして、それが採決せられた上で、協議會は第三インターナショナルの執行委員から公式に萬國語を承認してもらふこととし、その上で共産黨內で萬國語の宣傳をなし、また將來各國共産黨間の通用語ときめやう」。

第三インターナショナル委員及び關係者十八名は上記の決議に賛成してゐる。ついて一月十八日 Pogany 及び Itschner の兩名は右に關し第三インターナショナル幹事 Kobetski と協議するところがあつたが Kobeiski は異議なく該決議案に賛成し、それが實現に盡すことを約した。

期成會は萬國語宣傳者の養成策として、次ぎの方法を採つてゐる。萬國語宣傳者はエスペラントか、イドのいづれを教ふるにしても、それが宣傳家としての完全を計るために、この二つに通しておく必要があること。

「光」出版部の株募集

CLARTE 出版部から通信があつて、同出版部の株を募集して來た「光」の運動が生れてからやがて二年になる。グルップ・クラルテは直接運動、講演會等の催の他に出版業に從事して來たのであるが、今般出版部を株式組織にして廣く海外に株を募集して居る。それをもつて、グループ・クラルテは諸種の運動の資金とする計畫である。クラルテの一株は五十フランであるが、利益配當の他に図書購入上の便宜がある。詳細は種蒔き社にお尋ねを乞ふ。

地方欄

△松山城から▽

かくめえと思ひながらまた便る。

眞理の種は一色だ。別に色づけなくつたて善い。色づけたら野鳥がほぢくつちまう。眞理の種は一色だ。野鳥の見付けないように種籠かくして世界中にふりまけ。世界の土は人間の土だ。種ぁ何處にでも蒔けばはえる。はえる事實ぁ極まりきつてる。野鳥の荒した世界の土に。うんさまけまけ。眞理の種ば一色だ。人間の土は世界皆ンなぢや。――

關門の波ゐ放れて松山に來た。此處は俺の生れた鄕土ださうだ。何處さいつて俺の身に安心する處もない。内に外にローフアアの身の懐疑の涯の寂しさつていつたらまた格別だ。關門の海は生々さ休みがなかつた。此處は小春日の日向ぼつこつて處だ。あそこは革命の過渡期を想はし、此處はモリスの理想鄕を想はす、れむいけだるい様な處ぢあない。別に便らなくつたつて錆に戯る俳人の醸出を見ても想像つくだらう。故人では死期がある現在は嘘、酩雪、爵譲道なんて錆が出ており、形紙伸もほん近くだし、葬石が「ぼつちやん」を作つた所だ。

而しこれら錆樂人に反比して若い種蒔く人がゐないではない。關門便りに言つたように無形なるが故の中にこそ種の孕まれてる事實は在るのだらう而し松山の若い種芽はまだく歩みのろい。今「勞働者」の脇貞邦が歸つて蒔き最中らしい、同じ「勞働者」の渡邊滿三も金ちやん事件の入獄前歸つて種袋をうづんでゐた。此の春東京朝日に入つた「新人會」の門田武雄も松山だ。思想問題研究の小集さしては「伊豫日」の安部や「愛媛」の高市等がやつてる光土會さいふのもある。近く「無社會」さか「無衣者」さかいふ雜誌が出るさか出ないさかいふ話もある。ざつさこんな兩面だ。

その昔の十五萬石の殿樣のお城山なば取捲いて松山の街はある。街を取捲いて廣い平野が遠く展けてゐる。そのお城さお城山は展望遙かな公園地さなつた。街にはそうした蒔人が巣食ふようになつた。近傍平野はたわゝに實つた時季收穫の秋だ。

死んだ漱石が此の夕方ぶらくさ白手拭を染めに通つた、いでゆの街道はほご近いすぐ此の下に見らるゝ。その葬石が白手拭を赤手拭にさ日がなく染めに通つた道後のいでゆを今も俺は好む。高が二千五百年許りさ知られた日本歷史なんかよりも遙かそのかみから續いて來てゐるそのいでゆ。下から上へ噴涌する赤いぬくい泉。それが好きだ。何だか死國の島がその爲生かされてゐるような氣がする程だ。俺の赤子時代は産湯からして赤い此の湯なんだものナ。

此處のローフアさは此の俺の様にして赤い腐湯などで成長して來た種類なんだらう。

此處の地の底は火山脈帶なんだ。火山脈帶の地方色が不知の間に染まされてゐるなんてするさ此んな理由で郷土なんてな特殊の懸線をつながるゝのだらうか。大杉はお勝りのアワでゞ德はお脊のトサ、お前達の〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇學丸だつて火山脈帶の四國だ。

用紙三枚もつぶれちやつてつい長々しくなつた。物言へなくなつたローフアの身は憐れなものだが、昔へば與太らしいものより眞面目さの貌かせなくなつた身はなほ憐れなものだ。愈々日が暮れた。

瀨戸内海の小富士などが夕靄に消へて行く。お城の壁も夕陽になめられ眞ッ赤になつた。歸て今に街へも火がさもるであらう。

此處らでもうかくめえ。

――松山城山にて――　穴明共三

△八郎湖東より▽

疲れたロシヤ丸偲ばせる天惠乏しい北國も、今年ばかりは五十の古老も知らぬさいふ秋日和が不思議につゞいた。僕等は毎日午前一時二時に起き出て終日「稻コキ」の音をさせて居る。折角貼り出された乾燥宣傳も大自然の皮肉には徒らに小作人反感さ階級意識を裏付けたに過ぎない。農業爭議の起らないことを見越した地主にとつて、米價釣上げの爲めには縣令もトラストも宣傳も檢査の高壓も意の如くなるさ思はれたことだらう。黄金時代を通過した地主には小作米の値上げで爭そかもすよりも米の聲價を高あることは「賢い策」だとした心理は讀める。小作人の黄金は過去二ケ年の農作であつて米價け直接の原因ではなかつた。地主さ小作人の黄金の原因は其本質を異にする。それにしても一度好況を通つた小作人に「人間らしい生活」の憧れが導火されるさ、生活の向上が火の樣に燃え盛る。小農の生活費が嵩むさ、地主が資惜しみの唯一の口實になる生産費が高騰する。此因果理法を知つてか知らぬのか、お役人の忠義立ては「不賢」の冷笑をのこして止らない。「愚鈍」其ものゝ樣に思はれて居た小作人から冷笑さ怨憤を克ら得た事が成功であつたらそれは何を意味するだらう。今年の産米が好成績であつてもそれは縣令やトラストや檢査の高壓や宣傳の爲ではない。「縣令の犬」「トラストの番頭」「檢査の鬼」「宣傳の奴」諸君の忠誠さ努力の結晶は農村の資本主義化であつた。そして農村の社會主義化への遠い忠義でもある。見よ諸君の運動が熾烈になればなる程「中農滅亡―」の聲は悲痛な唸りさなつて耳を打つ。

乾燥―乾燥良くせば質も變らず蟲付かず
　乾燥良くせば目方重くて搗て減らず
　乾燥良くせば肌も摺らずに光澤が出る
　東立すれば米に芽が出て目方ない
　乾燥は米の命だ價格も高い。

調製―麥や死米屑とりて粒が揃へば値段が騰る。
　調製良ければ搗て減らずに値段が騰る
　籾や稗赤米あれば値段を落す。

俵裝―良ければ運びよくして米漏らず。
　締厚く堅くしむれば蟲付かず。
　俵裝良くせば米は構まず値段が騰る

容量―品よくも容量足られば買手は逃げる
　容量良ければ信用ついて値段が騰る
　容量大切多く損るるも構はない。

秋田縣穀物檢査所

僕の村の或床屋のビラの下へ何時の間にか小作人のうたが貼られた。

　百姓は米の善惡解らぬものよ
　文字を讀めれば出作り知らぬ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

乾燥すけりや値段か安い
　地價は騰らず波立たず
米の命の乾燥待てば
　人の命がひからびる
檢査せぬのが惧しぢやないが
　雨の洩るのが氣にかゝる
麥死米積んだ米に
　麥さ外米何故混ぜる
俵數ふければ運びはいゝが
　運ぶ車ない車ない
緊くしむれば蟲付かれども
　堅くしめれば鬼がつく
俵數尽くすに人夫はいらぬ
　米が騰ればただでくる
容量足られば買手は逃げる
　買手逃げても賣る米はない
容量良くせば信用ついて
　米の仲買倉建てる
多く容るゝも構ないなどゝ
　馬鹿にするなよいつまでも

「素見し」踊りの若者が鼻唄にこれを唄つたのを今日聽いた。生産者の生活費の向上を惡む地主と「不賢の策」を許す寛容の小作人とは何といふ對照だらう。（利州）　一九二一・一〇、二八夜

△地方欄に力を入れてくれ▽

地方欄に力を入れてくれ。僕たちと同じ感じを持つてゐる同志、同じ血に湧き立つてゐる同志は、そこにもこゝにも到る所にゐる。お互に手を延べさへすれば心の底の同じ人たちであるお互は一も二もなく默つて居れぬ筈だ。昔は默つて忍從して來たであらう。しかし、そうして居れば居る丈けひどい目に遇されるまでだ。もういゝ加減にいゝ時分だ。常に默つてつぶやいてゐることは愚知といふものだ。そんなことが何になるものか。それが皆の精神を永久に腐らすといふものだ。既成の青年團や在郷軍人會に常に反抗する君たちよ、農民よ、勞働者よ、會員よ、その他あらゆる無産者たちよ、地方欄に力を入れてくれ。

新年號のために

人並に悦ばねばならぬか、悲しい正月。芽出たい月であるかために多くの人達に理由もなく欣ぶ。併し、悲しい正月。

この芽出たい正月に、ドイツではカール・リプクネヒトとロザ・ルクセンブルグのかなしい運命、そして日本では……言ふまい、言ふまい。併し、多數が喜び祝ふ斯の月に、多數のために斯くなつた運命の人々を憶はずに居られようか。

正月には此等の人達に對する二三の人達の感想を載せるとしよう。そして、あとは希望の滿ちた新らしい人たちの新らしい氣分の力作で全誌を埋めるとしよう。

聳人

俺は背く

石渡山逢

赤い旗が流れる——幻えいの巷に。
人はたほれる。
人は兄弟の死骸を踏みこえる。
兵隊の付け劍はひらめく——
鉛色の太陽の下に、
踏みつけられながら。民衆に背いて、
地をほるもぐらを——
半死人のけだものが俺の象徴に動く

——二一・一〇・二三——

赤いバンド號

齋藤善太郎

「赤いバンド」と「フレッシユな心」とにふるいつきたいほどのなつかしさを感じながら「手に入らなかつた號」や「新しい號」を拜見してゐます。お仕事の上に幸あれと心からく祈られます。一寸とおめにかゝつた佐々木さんや、お名前だけをおうかがひしての近江谷君のことなどはるかになつかしく想つたりします。

軍隊の古い町

秋田雨雀

齋藤善太郎君に逢ひました。仙臺の「samidcano」は少數ですけれども眞面目です。「種蒔く人」は非常な好評です。教會と病院と軍隊との古い町にも新しい種が蒔かれさうです。また蒔かなければなりません。Morigita Hara の遺骸の通過した後を通つて妙な感じがしました。然しただ妙な感じといふだけです。

エロシエンコを憶ふ

内野 清

我等が日
まこと我等が時ならで
いつか相見むと追はるる君と

×

自由なき國
生氣なき民なれば
詩人をさへ追はんとはする

×

騒擾のとある俱樂部の會合に
はじめて見つる
紅顔の君

×

頬紅き盲の君も
共なりし
彼の會合の夜を忘れず

×

革命の詩人にいと相應へりき
黄金の髪と
薔薇なす頬と

×

女子に見まほしき彼の金髪よ
何處の風に揺めくや
今

×

自由なき國を追はれて流れゆく
盲の君に
心寄する日

浅い考へ　小川未明

おはがき拝見いたしました。その後お變りもありせんか。今日あたりの新聞を見ますさ、不作のため小作人が流石蹶起してゐる樣子です。生活を中心に移動するのを知らずに、文字の上はかりやかましく言ふ、煽動するから騷ぐのだとでも思つてゐる、何さいふ淺い考へでせう。おそくても第二號の出るのをたのしみにいたしてゐます。

人間と蜜蜂　井本龍麿

人間が蜜蜂に云つた。

「勞働は神聖だ。お前達の仕事は神が與へたのだ。若しお前達が自分の仕事に忠實であるならばお前達は天國に行く事が出來るだらう」。

蜜蜂等は人間の敎へを大變有難く思つて喜こんだ。彼等は星を望んで野貝に出星、を戴いで家に歸つた。然し依然さして彼等は貧乏であつた。「パンのみで生られるものぢやない」。さ人間は又云つた。然し彼等はパンなしには生きられるものでないさ云ふこさを知つてゐた。漸々さ彼等は、人間が自分達の密を掠奪してる事を知るやうになつた。過度の勞働か苦痛になつて來た。

人間はあらゆる聲を絞つて叫んだ。「勤勉に追ひつく貧乏なし、天は自ら助くる者を助く。」さ。

然し蜜蜂等はもう其應事ではだまされなかつた。

「働かない者は食ふな」。さ彼等は云つた。

彼等は「天は自ら助くる者を助く」では掠奪を防ぐ事は出來ない事を、そして團結より外に通のない事を知づた。

「諸國の蜜蜂等よ、團結せよ。」さ彼等は叫んだ。

そして彼等のさびかゝつた槍は新しく磨かれればならなかつた。

僕の立場　武者小路實篤

御手紙拜見、三十一日か一日に東京をたちますから、それ迄に短かいものをかきます、しかし君達には氣に入らない處があるかさも思ひます。十年たつたら、僕の本當の考が君達にもわかるさ思つてゐます。責任をもつて進んで下さい。

鎭め得ぬ胸　勝目てる子

土にまみれ唯專念に鋤さりて耕す姿に掌の合はさるゝ

鎭め得ぬ胸の焔に我が肉も赤き血潮にやかれてぞ行く。

牢屋より　後藤謙太郎

▲監獄に見る夢夢不思議さよ一昧逕の街よ俺の所骸よ。

▲ロシヤなる革命主義者よ、悲慘なる君が的最後よ、俺は感謝す。

▲誰彼が鮮人二名さ捕へらる一朝の通信、吾は微笑す。一九二、一、九、一九栃木監獄にて

あゝ櫻島　柳貝宇一郎

鹿兒島の靑年です、私は鹿兒島の靑年です、櫻島はあゝまで、私を敎へます、早く立て、いつまで、盜族の道德を守るのだ、こう敎へてくれます、

鹿兒島には、悲痛を叫ぶ、靑年が多く、居ります、

時々敎へて下さいませ、私等はもう少こし深刻に硏究したいのです、どうか少しなりとも敎へて下さいませ。

ずゐぶんやられましたね　牛込にて　松本淳三

平林兄其他、ずい分やられましたね。御役人の言ふこさは聞くもので、でもいやな氣がします。また御詞ひした時、御話を伺ひます。

● 何云つてやがるんだ!　松村　燦

悲しむべき現象を考察し

呪ふべき惨劇を數へ上げ
ゆの因るところを看破して
而して後に……而して後に……
而して後に始めて
やつ付けやうつてう閑人は
中産階級知識階級つてう中立者なのだ
おゝブルジョアの世界で
軍國主義を皆滅しようと助長しようと
おゝブルジョアの世界で
いろんな慘劇を皆滅しようと助長しよう
とそは中立者にとつてのみ問題になれ
俺達プロレタリアには何のかゝはりもあ
りやしれえのだ

戰鬪を云々してゐる間は中立者なのだ一
旦俺達の味方になつた兄弟よ
ほんとにほんとに俺達の兄弟になつたの
ならば
そはトロツキーの（ブルジョアが亡びる
か俺達が亡びるだらう）戰ひの俺達と
亡びる時はいつしよに亡びようといふの
ならば
兄弟よ
たゞたゞ俺達の力を燃やす仕事をやつて
くれ

この次は非軍國主義號にする！
何いつてやがるんだ、べらんめえ！
やい、やい、なんて下られえことをして
呉れるんだ
軍國主義とはブルジョアの世界のものじ
やれえか
俺達の世界には軍國主義なんてれえのだ
是にしろ、非にしろ、軍國主義なんて云
ゝすることは
兄弟、しつかりしてくれろよ
それはブルジョア世界の空氣を半分ばか
り吸つてゐると云ふものだ

三井甲之先生のみた賀川さん

――東方時論――

又しても『豐彦論』かと諸君は苦笑さるるかもしれませんが、ここに御紹介するのは三井甲之先生の御論文ですから之も一興と存じます。東洋一の論理家たる先生の御卓論ですから吾々低能兒には或は誤解してゐる點もあるでせうが、事情酌量の上御見逃しの程を願ひます。先生に據りまする、『勞働者の示威運動を「おんな非嚴な光景」と見てゐる』賀川さん、『人示威行列の歩調の音』と「一萬數千人が突喊した時の鬨の聲」とを讃美歎として聞いてゐる』賀川さんの世界は『享樂の世界であつて實現の世界ではない。それは繪畫と音樂と俳優との舞臺藝術の世界である』のです。更に先生は、賀川さんの世界即「お伽噺の國」の『教儀』を「奴隷の國より自由の國へ、壓制の國より解放の國へ、暗黑の國より光明の國へ」であると說明されて、此等種々の抽象的概念を排斥せられてゐます。そして更に又先生は賀川さんが『政黨政治に就て、また米國の侵略主義に就てよりも、資本家の横暴』をより重要視する態度を以て、これは『綜合的見地よりも分析的見地を』『人生よりも概念を』『生活よりも制度を』『遠大の計劃よりも眼前の光景を』重要視しようとするものであると難じ『現日本の資本主義の產業組織のみが改革すべきでなく』『病源は他に存するのである』と喝破せられ「然るに『賀川氏の志す處置は局所療法であるからその治療の效果が手ぬるいのである』と叱咤されてゐます。吾々が見てあまりに『遠大の計劃を重要視』してゐる吾が賀川さんは、甲之先生に據れば、あまりに『眼前の光景を重要視』してゐるのでありす。さり乍ら、先生の御讃賞から察しましても、少なくも賀川さんが『資本主義の產業の組織を改革』せんと努力してゐる事だけは認められてゐる樣です。げに、賀川さんも眞の知己を得たものと云ふべきでせう。さるにても、今頃は『病源』さん、何處にどうしておぢやるやら。（赤帶）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

靜動――

「新詩人」――十二月號には角田、井上、花田等の詩、(詩界一年) 井上康文其他が載る。

「勞働者」――第六號は完全に出た。散々撲られたり、蹴飛ばされたりして。どうせ削られても意味がよく解かるから出した方がいゝ。東京巣鴨宮下一七八六勞働社

「異端」――赤い雜誌である。默つてゐる人達にも燃えた反抗がある。それらのこゑが聲も立てずに、心から流れてゐる。

「民衆詩」――「刺客の匕首と血の海にのたうつ有様を新聞で叫ぶ大聲は痛快だざまあみやがれ」、こんな痛快な叫びが表紙と僅か八頁の雜誌に滿ちてゐる。下澁谷一九二八．民衆詩社

「鐵道旅行案内」――まことに便宜な案内記だ。貧乏人にも早く旅行の出來る世の中が來るといゝ。 鐵道省

「新組織」――名の如く新社會のために新組織を高唱してゐる。しかし、それがためには破壞を主張してゐるやうでもありないやうでもある。筆者による。

「セキノイ」――俳句としては、こん度の方が好きだ。しかし、猿蟹合戰の記憶は忘れぬ。

「第三勞働新聞」――同じ勞働新聞でも主義上關西勞働者とは多少異つてゐるやうだ。しかし、賀川さんをやつつけてゐるところは同じだ。神戸榮町五ノ三二

「文藝旬報」――文壇誤失譜の中で「あれは、それ有名な出非すえ子さんの御手際に恐入りました。ブルドックの一疋より。 東京市外池袋七四六

「關西勞働者」――斯ふいふ雜誌が一般の手に入らぬことは惜しいことだ。それもそうだ常に恐ろしい眼が光つてゐるのだから。大阪西區空堀町一一

「無名」――四號である。段々普化して來たやうだ。偶には面喰らつてもよからう。

「無産社リーフレツト」――此可愛らしいリーフレツトは社會の各方面に對する配布用として出來たものです。最近山川均の「智識階級に與ふ」といふのが出來た。東京四谷南伊賀六〇

「ナロオド」――共產主義に對する有益な資料で滿されてゐる。斯ふいふ小冊が一般の手に渡らぬ勝なこと惜しい。東京本鄕駒込上富士前町五 新人會

「壞人」――怪人である。手厳しい批評もよし、圖寃人も亦獨特なものだ。

「現代文學」――十一月「新潮」の老人、新進をやつつけたところよし、洋文同く「今に見ろ」

「星」――十一號、奇麗なものである。どんな人が書いてゐることだらうなどと感じる。大阪府南河内郡村原村 大字市村

「靑蛙は默禱する」――保坂銀藏氏著同頭の外十四篇と詩と、歌劇三篇をおさめてゐる氏の詩風は純朴で高雅である、篇中「トロの軌り」などは帝王をさとる無邪氣な著者の氣持がいかんなく表はれてゐる人道的な意氣のうちにユーモアな情緒をふくんでゐる。

歌劇義經再興はかなり大部のもので亞細亞主義の振興を値したものである。(牛込區岩戸町三竹中書店二圓)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

我邦唯一の社會主義專門雜誌

社會主義研究

十二月號要目

◇一九二一年の世界（トロツキー）

◇無産階級國家の裁判

◇無産階級の哲學

◇勞農露國の裁判制度

◇人民裁判構成法

◇日本民衆鬪爭史

◇マルクスの社會學說

水曜會パンフレット

◇なまけ者と社會主義（堺利彦）

◇牙をぬかれた狼（山川菊榮）

◇勞農露國の農業制度（山川均）

◇勞農ロシア問答（横田千元）

◇タンクの水（山川均）

◇リープクネヒトとルクセンブルグ（山川菊榮）

◇私は如何にして社會主義者となつたか（西雅雄）

—以下續刊—

定價 各一冊拾錢　送料 五冊迄 二錢

定價 一部參拾錢 一年參圓卅錢

◆東京市大森入新井町 振替東京三四一九一 平民大學出版部◆

保坂銀藏著

（詩集と戯曲）

四六版上等布製頗美装

寫眞數葉　全頁ラフ紙

定價二圓　税十二錢

見よ新詩人の出現を！

書名同題の詩外十四篇の詩集で尙歌劇三篇を收めてゐる詩は純情高雅にして著者の人道的な精神をよく表はし歌劇「義經再興」は著者の大亞細亞主義思想を最高の濃度に飽和してゐる壓卷の力作である。

（讀賣批評）

東京市牛込區岩戸町三番地

竹中書店

振替口座東京三九二三八番

民衆精神の權化たる
野の偉人の眞面目は玆に始めて描かれたり

田中正造翁

四六版新裝　四百三十頁　定價貳圓　送料拾貳錢

木下尚江氏著

「良人の自由」「火の柱」等の快著を以て文壇を聳動し、德富蘆花氏と並び稱せられた木下尙江氏が全く筆を捨てゝからもう十年になる。爾來、門を閉ぢて絕對に世と相涉らず、瞑想默思、悟達大に到ると聞いたが、今度、渡瀨河畔の義人田中正造翁の爲めに此の一書を編み、翁の日記書簡を基礎として、具に翁の人を描き事を傳へられた。翁は民衆精神の權化と云ふ可き野の偉人であつた。其の七十年の生涯の記錄は、まことに一代の人心を警醒して餘りあるものがある。著者は、生前、翁と親炙して肝膽相照らすの槪があつた。十年の沈默を破つて突如此の書を公にせるもの、果して何を期するのであらうか。今は、世の人ひとしく、此の偉人の前に額づく可き時代である。

東京牛込矢來町三番地　振替東京一七四二番
新潮社
電話番町 八〇九番 八九九番 八三六番

お正月の用意

◆歳暮格安反物賣出し（十二月一日より　九日まで）

◆羽子板陳列（十二月一日より廿四日まで）

◆新年用食器陳列（十二月一日より……）

◆挿花器陳列（十二月一日より……）

◆文士書家俳優寫眞會（十二月一日より　五日まで）

◆仕立衣裳陳列（十二月一日より　九日まで）

◆仕立座蒲團陳列（十二月十一日より廿日まで）

◆新年用盆栽陳列（十二月十三日より……）

◆三越歳の市（十二月十三日より……）

◆クリスマス賣出し（十二月十八日より……）

◆定休日は十二月十日◆十二月廿六日◆

お歳暮には三越の商品券

東京

三越呉服店

前號目次

本欄

『マキシムゴルキのために』題言

現實のロシアと架空のロシア（評論）……………全文削除　平林初之輔

Tristitia Mundi（詩）……村松　正俊

北天の星（詩）…………百田　宗治

ロシアの民衆に與ふ（詩）全文削除……………………加藤　一夫

幹が私を刺した日（詩）……大藤　治郎

亡き友を憶ふ（詩）…………小牧　近江

神樣とロシア（詩）全文削除　金子　洋文

飢えて死ぬロシアに（詩）…川路　柳虹

血の日曜日（詩）全文削除…井上　康文

再生の日の海を眺めて（詩）松本　淳三

翼のごとく（詩）…………福田　正夫

酋長と噴火（童話）…………秋田　雨雀

村長殺し（小說）…………片岡　厚

火を點ず（小說）…………小川　未明

批評欄――小牧―弘二―賢三―逸平―

正俊―正夢―孝丸―洋文・

表紙及カット――柳瀨正夢

世界欄――地方欄――漫畫欄――雜―

編輯後記

重傷者、經傷者は盡く全快した。その内にまた書いてくれるそうだ。こん度ノーベル賞を獲たアナトル・フランスは賞金の全部を飢ゑたるロシヤに寄附したそうだ。日本の政府もこん度にこん度は百萬圓かをそのロシアに寄附するとかせぬとか言ふことだ。種蒔く人、種蒔けぬ人。アナトル・フランスは僕たちに何か送つてくれるそうであるが、同じ約束をしてゐるアンリ・バルビユスはこの十月旅行中ウインで病氣にかかつたが、大したことがないそうだ。

石川三四郎は近々渡佛されるが本誌のために時々便をくれることになつてゐる。

種蒔く人も案外根強く、一とにかく三號まで漕ぎつけた。そして、いろいろの期待を我々に求めて今年も暮れようとしてゐる。これからが乘出す時だ。同時に、皆で內容に戰鬪力を充實せねばならぬ時である。「發人」欄にも各方面から遠慮ない力を入れてもらひたい。

厮布の本屋さんこれからもまた。あることでせうから何分よろしく。

定價　一部卅錢□半年前金壹圓八拾錢□一年前金參圓六拾錢御注文はすべて前金のこと□代金の領收は雜誌發送を以てする□送料內國一錢外國四錢

廣告　廣告及廣告料金については直接本社宛問合せを乞ふ

宛先　寄稿、通信、購讀申込及び送金、其他本誌に關する一切の御用向書籍雜誌等の寄贈は凡て『種蒔き社』宛

締切　每月五日

大正十年十一月廿九日印刷納本
大正十年十二月一日發行

發行人兼編輯人
印刷人　東京市赤坂區青山北町一丁目八番地　近江谷駉

印刷所　東京市京橋區南金六町十二番地　英文通信社印刷所

發行所　東京市赤坂區青山北町一丁目八番地　種蒔き社

大賣捌　東京堂　上田屋　北隆館　至誠堂　東海堂

本號特價金四拾錢

大正十年十一月二十九日印刷納本
大正十年十二月一日發行　大正十年　月　日第三種郵便物認可

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大正十年十一月二十九日印刷納本
大正十年十二月一日發行　大正十年　月　日第三種郵便物認可

本號特價金四拾錢

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA